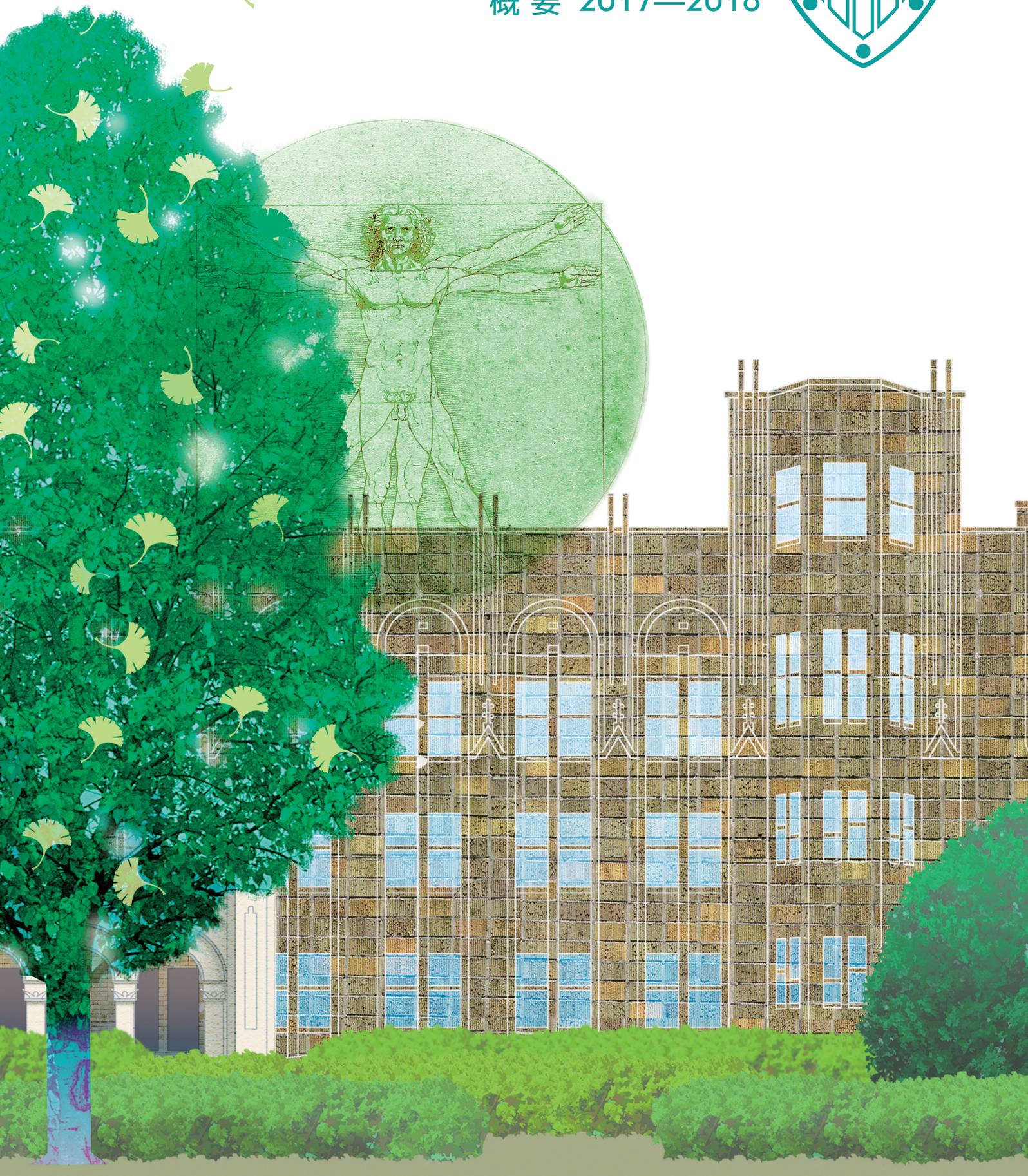
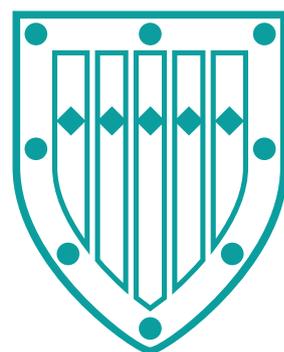
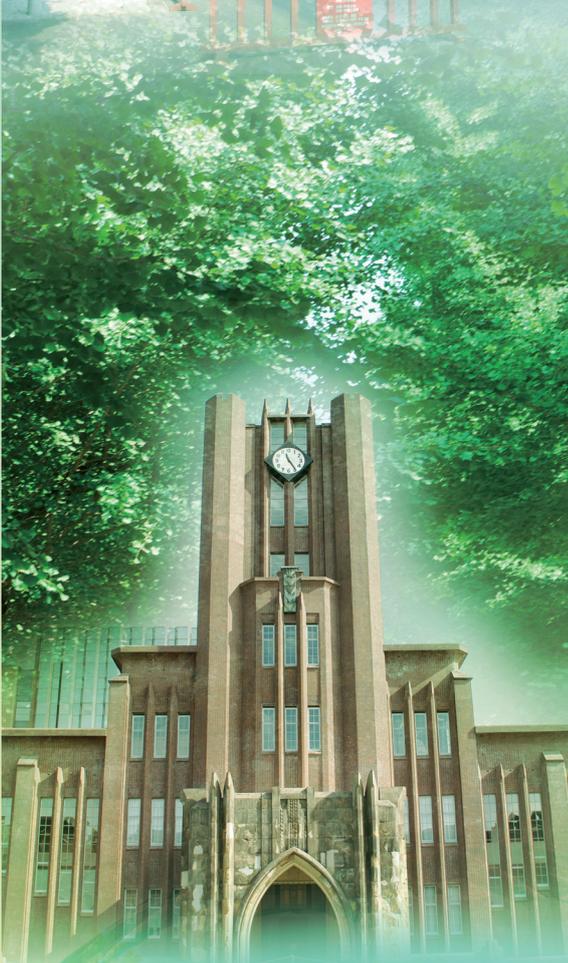


東京大学大学院
医学系研究科・医学部

概要 2017—2018





ごあいさつ

東大医学部は安政5年に設立され、2008年5月に150年周年を迎えました。教員、職員、学生が一体となり、盛大な記念式典を行うと共に、医学部本館前には学生のデザインによる記念モニュメントが作られました。また、150周年記念事業として、2011年に医学図書館に健康と医学の博物館を設立し、今後は病院地区でクリニカルリサーチセンターの建設を進めています。これらの歴史と伝統の上に、東大医学部は常に発展を必要とされています。

医学部は各学年に医学科110名、健康総合科学科（2010年に健康科学・看護学科から改称）40名の学生が在籍し、大学院医学系研究科には多くのコースがあり、毎年150-200名が博士となって卒業しています。PhD-MDコースや2008年に新設されたMD研究者育成プログラムでは優秀な学生が研究者としての道を歩み始めています。2010年には臨床医学研究に興味をもつ臨床医、学生のために臨床研究者育成プログラムを開始しました。また、2007年に作られた「公共健康医学専攻（専門職大学院）」には多くの優秀な医師や公衆衛生研究者が入学しています。他学部を卒業し、医科学修士課程に入学した学生の多くは博士課程でも活躍しています。

21世紀、飛躍的發展を遂げている生命科学の核としての医学、また、成熟した高齢社会を迎えての総合健康科学、予防医学、環境医学、介護学などの重要性はいうまでもありません。さらにはプレジジョンメディシンの実現へ向けてゲノム科学の導入を進めています。これらの多様な分野で国際的に活躍する教員や特任研究員（ポスドク）を有しており、また、産学連携を目指した多くの寄付講座や社会連携講座が存在します。卓越大学院では他研究科との研究交流や、大学院生の支援を進めています。東南アジアなどの留学生の受け入れや多くの欧米の大学との国際交流も積極的に進めています。

時代の先端を行く医学の研究と教育を進め、異なる分野との融合を進めながら人間の体の仕組みや病気の発症の機構、診断法や治療法、看護・介護法の開発、予防医学の推進、さらに医療制度や病院のあり方などを探求し、社会に発信していくのが私たちの課題です。病気で苦しむ多くの患者に対し、現在の最高の医療を遂行するとともに、明日の医療の創成のために、トップレベルの研究者を育成することが本学の基本的ミッションです。

東京大学大学院医学系研究科・医学部
医学系研究科長・医学部長

宮園浩平



沿革

安政 5年(1858)	5月	江戸市中の蘭医 83名の醸金により神田御玉ケ池に種痘所が設立された。
	11月	種痘所は、神田相生町からの出火により類焼したが、伊東玄朴の家などで業務を継続した。
安政 6年(1859)	9月	種痘所を下谷和泉橋通りに新築し移転した。
万延 元年(1860)	10月	幕府直轄の種痘所となった。
文久 元年(1861)	10月	種痘所を西洋医学所と改称し、教育・解剖・種痘の3科に分かれ西洋医学を講習する所となった。
文久 3年(1863)	2月	西洋医学所は、医学所と改称された。
明治 元年(1868)	7月	医学所は、横浜にあった軍事病院を下谷藤堂邸に移し、医学所を含めて、大病院と称することになった。
明治 2年(1869)	2月	大病院は、医学校兼病院と改称された。
	12月	医学校兼病院は、大学東校と改称された。
明治 4年(1871)	7月	文部省が設置され、大学東校は、東校と改称された。
明治 5年(1872)	8月	学制が布かれ、東校は、第一大学区医学校と改称された。
明治 7年(1874)	5月	第一大学区医学校は、東京医学校と改称された。
明治 9年(1876)	11月	東京医学校は、本郷に移転した。
明治10年(1877)	4月	東京医学校は、東京開成学校と合併し東京大学となり、東京医学校は、東京大学医学部になった。
明治19年(1886)	3月	東京大学が帝国大学となり、東京大学医学部は、帝国大学医科大学となった。大学院が設置された。
明治30年(1897)	6月	帝国大学は、東京帝国大学となった。
大正 6年(1917)	8月	文部省医師開業試験附属永楽病院が、本学に移管され東京帝国大学医科大学附属医院小石川分院となった。
大正 8年(1919)	4月	学部制が布かれ、医科大学は医学部となった。
昭和 6年(1931)	2月	医学部1号館が竣工した。
昭和11年(1936)	1月	医学部脳研究室が、堀越久三郎氏の寄付により発足した。
	11月	医学部2号館(本館)が竣工した。
昭和22年(1947)	10月	東京帝国大学は、東京大学となった。
昭和25年(1950)	4月	看護婦養成施設が、医学部附属看護学校と改称設置された。
昭和28年(1953)	4月	衛生看護学科が、設置された。
	7月	東京大学に新制の大学院が設置され、生物系研究科 医学専門課程博士課程が設けられた。医学部脳研究室が、医学部附属脳研究施設として管制化された。
昭和31年(1956)	4月	医学部附属助産婦学校が、設置された。
昭和33年(1958)	4月	医学部薬学科が、薬学部として独立の学部となった。
	5月	東京大学医学部創立百年記念式典が挙行された。
昭和36年(1961)	3月	医学部総合中央館(医学図書館)が、東京大学医学部創立百年記念事業の一つとして竣工した。
	4月	医学部附属医用電子研究施設が、設置された。
昭和40年(1965)	4月	医学部附属音声・言語医学研究施設が、設置された。 衛生看護学科が、保健学科となった。 東京大学大学院が改組され、生物系研究科医学専門課程は医学系研究科となった。 医学系研究科に保健学専門課程が、設置された。

昭和41年(1966)	9月	医学部3号館が竣工した。
昭和46年(1971)	4月	医学部附属動物実験施設が、設置された。
昭和48年(1973)	3月	医学部動物実験棟が竣工した。
昭和58年(1983)	1月	医学部3号館別棟が竣工した。
昭和60年(1985)	9月	医学部国際交流室が、設置された。
昭和62年(1987)	4月	東京大学大学院専門課程は専攻となった。
平成4年(1992)	4月	保健学科が、健康科学・看護学科となった。 医学系研究科に国際保健学専攻が、設置された。
	7月	医学部放射線研究施設が、設置された。
平成7年(1995)	4月	大学院講座制への移行に伴い、第三基礎医学、社会医学、第三臨床医学、第四臨床医学の4専攻を廃止し、病因・病理学、社会医学、生殖・発達・加齢医学、外科学の4専攻に改組された。
平成8年(1996)	4月	大学院講座制への移行に伴い、第一臨床医学、保健学、国際保健学の3専攻を廃止し、内科学、健康科学・看護学、国際保健学の3専攻に改組された。
平成9年(1997)	4月	大学院講座制への移行に伴い、第一基礎医学、第二基礎医学、第二臨床医学の3専攻を廃止し、分子細胞生物学、機能生物学、生体物理医学、脳神経医学の4専攻に改組された。 この改組に伴い、脳研究施設、医用電子研究施設、音声言語医学研究施設の3施設が廃止された。
平成11年(1999)	4月	医学系研究科に主に医学科・歯学科・獣医学科以外の学部学科卒業者を対象とする医科学修士課程が設置された。
平成12年(2000)	4月	東京大学医学教育国際協力研究センターが設置された。(学内共同教育研究施設)
平成13年(2001)	4月	医学部附属病院分院が医学部附属病院に統合された。
平成14年(2002)	3月	医学部附属看護学校、医学部附属助産婦学校が閉校となった。 医学部教育研究棟(第1期)が竣工した。
平成15年(2003)	4月	疾患生命工学センターが設立され、放射線研究施設と実験動物施設が統合された。
平成16年(2004)	4月	東京大学は、国立大学法人東京大学となった。
平成17年(2005)	3月	医学部教育研究棟(第2期)が竣工した。
平成19年(2007)	4月	医学系研究科に公衆衛生の専門職大学院(公共健康医学専攻)が設置された。
平成20年(2008)	5月	東京大学医学部・医学部附属病院創立百五十年記念式典が举行された。
平成22年(2010)	4月	健康科学・看護学科が、健康総合科学科となった。
平成23年(2011)	1月	健康と医学の博物館が、設置された。
平成24年(2012)	4月	医学系研究科に研究倫理支援室が設置された。
平成25年(2013)	4月	東京大学医学教育国際協力研究センター(学内共同研究施設)は、医学系研究科附属医学教育国際研究センターに改組された。
平成25年(2013)	10月	医学系研究科にライフサイエンス研究機器支援室が設置された。
平成27年(2015)	4月	医学系研究科に臨床実習・教育支援室が設置された。
平成29年(2017)	4月	医学系研究科にグローバルナースングリサーチセンターが設置された。

医学系研究科

医学系研究科長 宮園 浩平



分子細胞生物学

p14

細胞生物学・解剖学	細胞生物学		
	生体構造学	教授	吉川 雅英
	細胞構築学	准教授	金井 克光
	神経細胞生物学	教授	岡部 繁男
生化学・分子生物学	分子生物学	教授	水島 昇
	細胞情報学	教授	間野 博行
	代謝生理化学	教授	栗原 裕基



機能生物学

p17

*連携講座	臨床ゲノム情報学／脂質医科学		
生理学	統合生理学	教授	大木 研一
	細胞分子生理学	教授	松崎 政紀
	神経生理学	教授	狩野 方伸
薬理学	細胞分子薬理学	教授	廣瀬 謙造
	システムズ薬理学	教授	上田 泰己



病因・病理学

p19

病理学	人体病理学・病理診断学	教授	深山 正久
		准教授	森川 鉄平
		准教授	牛久 哲男
	分子病理学	教授	宮園 浩平
		准教授	鯉沼 代造
微生物学	微生物学	教授	畠山 昌則
	感染制御学	教授	森屋 恭爾
免疫学	免疫学	教授	高柳 広
		准教授	新田 剛



生体物理医学

p21

*連携講座	腫瘍病理学／感染病態学／分子腫瘍学		
放射線医学	放射線診断学	教授	阿部 修
		准教授	森 壘
	放射線治療学	准教授	中川 恵一
	核医学	准教授	高尾 英正
医用生体工学	システム生理学	准教授	山本希美子
	生体情報学	教授	浦野 泰照
	生体機能制御学	准教授	阿部 裕輔



脳神経医学

p23

基礎神経医学	神経病理学	教授	岩坪 威
	神経生化学	教授	尾藤 晴彦
	神経生物学	教授	廣瀬 謙造
統合脳医学	発達脳科学		
	認知・言語神経科学		
	システム脳医学		
	こころの発達医学	准教授	金生由紀子
臨床神経精神医学	精神医学	教授	笠井 清登
		准教授	垣内 千尋
		准教授	神出誠一郎
	神経内科学	准教授	清水 潤
	脳神経外科学	教授	齊藤 延人
		准教授	中富 浩文



社会医学

p26



内科学

p28



生殖・発達・加齢医学

p32

社会予防医学	分子予防医学	教授	松島 綱治
	公衆衛生学	教授	小林 廉毅
		准教授	豊川 智之
法医学・医療情報経済学	法医学	教授(委嘱)	岩瀬博太郎
		准教授	榎野 陽介
	医療情報学	教授	大江 和彦
*連携講座	がん政策科学		
器官病態内科学	循環器内科学	教授	小室 一成
	呼吸器内科学	教授	長瀬 隆英
	消化器内科学	教授	小池 和彦
	腎臓内科学	教授	南學 正臣
生体防御腫瘍内科学	内分泌病態学	教授	南學 正臣
	代謝・栄養病態学	教授	門脇 孝
		准教授	山内 敏正
	血液・腫瘍病態学	教授	黒川 峰夫
	アレルギー・リウマチ学		
	生体防御感染症学	教授	森屋 恭爾
	准教授	奥川 周	
	ストレス防御・心身医学	准教授	吉内 一浩
病態診断医学	臨床病態検査医学	教授	矢富 裕
		准教授	池田 均
	輸血医学	教授	岡崎 仁
*連携講座	分子糖尿病学		
産婦人科学	生殖内分泌学	教授	藤井 知行
		准教授	永松 健
	生殖腫瘍学	准教授	織田 克利
	周産期医学	准教授	甲賀かをり
	分子細胞生殖医学	教授	大須賀 穰
		准教授	平池 修
小児医学	小児科学	教授	岡 明
		准教授	滝田 順子
	発達発育学	准教授	北中 幸子
	小児外科学	准教授	藤代 準
	小児腫瘍学	准教授	滝田 順子
加齢医学	老年病学	教授	秋下 雅弘
		准教授	小川 純人
	老化制御学	教授	秋下 雅弘
*連携講座	成育政策科学		



外科学

p35

臓器病態外科学

呼吸器外科学	教授	中島 淳
心臓外科学	教授	小野 稔
	准教授	平田 康隆
消化管外科学	教授	瀬戸 泰之
	准教授	野村 幸世
肝胆膵外科学	教授(委嘱)	國土 典宏
	准教授	長谷川 潔
泌尿器外科学	准教授	福原 浩
	准教授	藤村 哲也
人工臓器・移植外科学	准教授	阪本 良広
腫瘍外科学	教授	渡邊 聡明
	准教授	野澤 宏彰
血管外科学	教授	渡邊 聡明
乳腺・内分泌外科学	准教授	多田敬一郎

感覚・運動機能医学

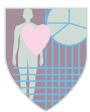
皮膚科学	教授	佐藤 伸一
	准教授	浅野 善英
形成外科学	教授(委嘱)	岡崎 睦
	准教授	飯田 拓也
口腔顎顔面外科学	教授	高戸 毅
	准教授	星 和人
	准教授	西條 英人
整形外科	教授	田中 栄
	准教授	齋藤 琢
眼科学	教授	相原 一
	准教授	加藤 聡
	准教授	蕪城 俊克
	准教授	白井 智彦
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	教授	山岨 達也
	准教授	岩崎 真一
	准教授	近藤 健二
リハビリテーション医学	教授	芳賀 信彦

生体管理医学

麻酔学	教授	山田 芳嗣
	准教授	内田 寛治
救急科学	教授	森村 尚登
	准教授	橘田 要一

健康科学

健康社会学	准教授	近藤 尚己
精神保健学	教授	川上 憲人
疫学・予防保健学	教授	松山 裕
	准教授	大庭 幸治
生物統計学	教授	松山 裕
	准教授	大庭 幸治
健康学習・教育学	教授	橋本 英樹
健康増進科学	准教授	瀧本 禎之
医療倫理学	教授	赤林 朗
	准教授	瀧本 禎之



健康科学・看護学

p42



健康科学・看護学

p42



国際保健学

p46



公共健康医学

p49

予防看護学	看護体系・機能学	准教授	武村 雪絵
	看護管理学	准教授	武村 雪絵
	家族看護学	教授	上別府圭子
	地域看護学	教授	山本 則子
	行政看護学		
臨床看護学	高齢者在宅長期ケア看護学	教授	山本 則子
	緩和ケア看護学	教授	山本 則子
	母性看護学・助産学	准教授	春名めぐみ
	精神看護学	教授	川上 憲人
		准教授	宮本 有紀
	老年看護学	教授	真田 弘美
		准教授	仲上豪二郎
	創傷看護学	教授	真田 弘美
*連携講座	精神保健政策学		
国際社会医学	国際保健政策学	教授	渋谷 健司
		准教授	Gilmour Stuart
	国際地域保健学	教授	神馬 征峰
国際生物医科学	人類遺伝学	教授	徳永 勝士
		准教授	馬淵 昭彦
	発達医科学	教授	水口 雅
		准教授	田中 輝幸
	人類生態学	准教授	梅崎 昌裕
	生物医化学	教授(委嘱)	野崎 智義
		准教授	渡邊 洋一
*連携講座	熱帯医学・マラリア学		
疫学保健学	生物統計学	教授	松山 裕
		准教授	大庭 幸治
	社会予防疫学	教授	佐々木 敏
	臨床疫学・経済学	教授	康永 秀生
	医療コミュニケーション学	教授	木内 貴弘
		准教授	石川ひろの
行動社会医学	精神保健学	教授	川上 憲人
	健康教育・社会学	准教授	近藤 尚己
	保健社会行動学	教授	橋本 英樹
	健康増進科学	准教授	瀧本 禎之
	医療倫理学	教授	赤林 朗
		准教授	瀧本 禎之
医療科学	健康医療政策学	教授	小林 廉毅
		准教授	豊川 智之
	医療情報システム学	教授	大江 和彦
	臨床情報工学	教授	小山 博史
	法医学・医事法学	教授(委嘱)	岩瀬博太郎
		准教授	榎野 陽介
*連携講座	保健医療科学		



疾患生命工学センター

センター長 岡部繁男

p53

分子病態医科学部門	教授	宮崎 徹
	准教授	新井 郷子
構造生理学部門	教授	河西 春郎
医療材料・機器工学部門	教授	東 隆
	准教授	伊藤 大知
臨床医工学部門	教授	鄭 雄一
	准教授	大庭 伸介
健康環境医工学部門	教授	村上 誠
	准教授	大迫誠一郎
動物資源学部門	教授	饗場 篤
	准教授	中尾 和貴
	准教授	葛西 秀俊
放射線分子医学部門	教授	宮川 清
医工情報学部門	准教授	今井 健
研究基盤部門		
動物資源研究領域	教授	饗場 篤
放射線研究領域	教授	宮川 清
医工情報研究領域	准教授	今井 健



医学教育国際研究センター

センター長 山岨達也

p56

医学教育学研究部門	教授	江頭 正人
医学教育国際協力学研究部門		



グローバルナースングリサーチセンター

センター長 真田弘美

p57

ケアイノベーション創生部門	教授	真田 弘美
	特任准教授	大江 真琴
看護システム開発部門	教授	上別府圭子
	教授	山本 則子
	准教授	武村 雪絵
	准教授	宮本 有紀
	准教授	春名めぐみ



教育研究関連施設

p58

国際交流室	室長	瀬戸 泰之
MD研究者育成プログラム室	室長	尾藤 晴彦
研究倫理支援室	室長	矢富 裕
	副室長	赤林 朗
ライフサイエンス研究機器支援室	室長	北 芳博
臨床実習・教育支援室	室長	山岨 達也
医学図書館	館長	高戸 毅
健康と医学の博物館	館長	大江 和彦

寄付講座

骨・軟骨再生医療	特任准教授	松本 卓巳
軟骨・骨再生医療(富士ソフト)	特任准教授	疋田 温彦
免疫細胞治療学	特任教授	垣見 和宏
先端臨床医学開発	特任准教授	鈴木 淳一
コンピュータ画像診断学／予防医学	特任教授	林 直人
	特任准教授	宇野 漢成
	特任准教授	吉川 健啓
医療安全管理学(東京海上日動)	特任准教授	安樂 真樹
臨床試験データ管理学		
ユビキタス予防医学	特任准教授	池田 祐一
関節機能再建学	特任准教授	茂呂 徹
重症心不全治療開発	特任准教授	波多野 将
分子構造・動態・病態学	特任教授	廣川 信隆
ゲノム医学	特任准教授	河津 正人
コンチネンス医学	特任教授	井川 靖彦
ライフサポート技術開発学(モルテン)	特任教授	森 武俊
ユースメンタルヘルス		
健康と人間の安全保障(AXA)	特任教授	井上真奈美
肺高血圧先進医療研究学	特任准教授	瀧本 英樹
免疫療法管理学	特任准教授	神田 浩子
慢性腎臓病(CKD)病態生理学	特任准教授	稲城 玲子
運動器疼痛メディカルリサーチ&マネジメント	特任教授	松平 浩
	特任准教授	岡 敬之
分子糖尿病科学	特任准教授	脇 裕典
統合的分子代謝疾患科学	特任准教授	岩部 真人
骨免疫学	特任准教授	岡本 一男
地域医薬システム学	特任教授	今井 博久
医療経済政策学	特任教授	田倉 智之
生物統計情報学	特任教授	小出 大介
	特任准教授	平川 晃弘
ロコモ予防学	特任教授	吉村 典子
分子神経学	特任教授	辻 省次
	特任准教授	三井 純
新世代創薬開発	特任准教授	松岡 茂

社会連携講座

健康空間情報学	特任准教授	脇 嘉代
リビドミクス	特任教授	清水 孝雄
	特任准教授	徳舛富由樹
アドバンスト ナーシング テクノロジー	特任准教授	村山 陵子
音声病態分析学	特任准教授	徳野 慎一
ヘルスサービスリサーチ	特任准教授	城 大祐
スキンケアサイエンス	特任准教授	峰松 健夫
医療品質評価学	特任教授	宮田 裕章
	特任准教授	縄田 寛
肥満メタボリックケア	特任准教授	愛甲 丞
イメージング看護学	特任准教授	藪中 幸一

研究ユニット等

未来医療研究人材養成拠点形成事業 「メディカル・イノベーション推進人材の養成」	特任准教授	吉本 真
未来医療研究人材養成拠点形成事業 「新しい大学ー地域間連携での研究人材養成」	特任准教授	山中 崇
ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム (リーディング大学院構築事業費)	特任准教授	江幡 正悟
ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム (リーディング大学院構築事業費)	特任准教授	橋本 唯史
博士課程教育リーディングプログラム「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム」	特任准教授	李 廷秀

医学部

医学部長 宮園 浩平

医学科

細胞生物学・解剖学／生化学・分子生物学／生理学／薬理学／病理学／
微生物学／免疫学／放射線医学／医用生体工学／基礎神経医学／統合脳医学／
臨床神経精神医学／社会予防医学／医学原論・倫理学／
法医学・医療情報経済学／器官病態内科学／生体防御腫瘍内科学／
病態診断医学／産婦人科学／小児医学／加齢医学／臓器病態外科学／
感覚・運動機能医学／生体管理医学

健康総合科学科

家族看護学／地域看護学／基礎看護学／老年看護学／母性看護学・助産学／
成人保健・看護学／精神衛生・看護学／保健社会学／保健管理学／
疫学・生物統計学／人類生態学／保健栄養学／母子保健学



診療科

診療部門
(内科診療部門)

総合内科	教授	南學	正臣
循環器内科	教授	小室	一成
呼吸器内科	教授	長瀬	隆英
消化器内科	教授	小池	和彦
腎臓・内分泌内科	教授	南學	正臣
糖尿病・代謝内科	教授	門脇	孝
	准教授	山内	敏正
血液・腫瘍内科	教授	黒川	峰夫
アレルギー・リウマチ内科			
感染症内科	教授	森屋	恭爾
	准教授	奥川	周
神経内科	准教授	清水	潤
老年病科	教授	秋下	雅弘
	准教授	小川	純人
心療内科	教授	赤林	朗
	准教授	吉内	一浩
	准教授	瀧本	禎之

診療部門
(外科診療部門)

一般外科	教授	渡邊	聡明
胃・食道外科	教授	瀬戸	泰之
	准教授	野村	幸世
大腸・肛門外科	教授	渡邊	聡明
	准教授	野澤	宏彰
肝・胆・膵外科	准教授	長谷川	潔
	准教授	阪本	良弘
血管外科	教授	渡邊	聡明
	准教授	野澤	宏彰
乳腺・内分泌外科	准教授	多田敬一郎	
人工臓器・移植外科	准教授	長谷川	潔
	准教授	阪本	良弘
心臓外科	教授	小野	稔
	准教授	平田	康隆
呼吸器外科	教授	中島	淳
脳神経外科	教授	齊藤	延人
	准教授	中富	浩文
麻酔科・痛みセンター	教授	山田	芳嗣
	准教授	内田	寛治
泌尿器科・男性科	准教授	福原	浩
	准教授	藤村	哲也
女性外科	教授	大須賀	穰
	准教授	織田	克利
	准教授	平池	修
	准教授	甲賀かをり	

診療部門
(感覚・運動機能科
診療部門)

皮膚科	教授	佐藤	伸一
	准教授	浅野	善英
眼科	教授	相原	一
	准教授	加藤	聡
	准教授	蕪城	俊克
整形外科・脊椎外科	教授	田中	栄
	准教授	齋藤	琢

中央施設部門

診療部門 (感覚・運動機能科 診療部門)	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	教授	山嵜 達也
		准教授	岩崎 真一
		准教授	近藤 健二
	リハビリテーション科	教授	芳賀 信彦
	形成外科・美容外科	准教授	飯田 拓也
	口腔顎顔面外科・矯正歯科	教授	高戸 毅
		准教授	星 和人
		准教授	西條 英人
診療部門 (小児・周産・女性科 診療部門)	小児科	教授	岡 明
		准教授	北中 幸子
		准教授	滝田 順子
	小児外科	准教授	藤代 準
	女性診療科・産科	教授	藤井 知行
		准教授	甲賀かをり
		准教授	永松 健
		教授	笠井 清登
診療部門 (精神神経科診療部門)	精神神経科	准教授	垣内 千尋
		准教授	神出誠一郎
		教授	阿部 修
診療部門 (放射線科診療部門)	放射線科	准教授	中川 恵一
		准教授	森 壱
		准教授	高尾 英正
		教授	鈴木 洋史
薬剤部	教授	矢富 裕	
検査部	准教授	池田 均	
手術部	教授	安原 洋	
	准教授	深柄 和彦	
放射線部	教授	阿部 修	
救急部	教授	森村 尚登	
	准教授	橘田 要一	
	准教授	中島 勸	
輸血部	教授	岡崎 仁	
総合周産期母子医療センター	教授	藤井 知行	
	教授	高橋 尚人	
リハビリテーション部	教授	芳賀 信彦	
医療機器管理部			
材料管理部	准教授	深柄 和彦	
集中治療部	教授	森村 尚登	
	准教授	橘田 要一	
病理部	教授	深山 正久	
	准教授	牛久 哲男	
	准教授	佐々木 毅	
角膜移植部	准教授	臼井 智彦	
無菌治療部	教授	黒川 峰夫	
光学医療診療部	准教授	藤城 光弘	
血液浄化療法部	教授	南學 正臣	
地域医療連携部	教授	笠井 清登	
	准教授	住谷 昌彦	
感染制御部	教授	森屋 恭爾	
企画情報運営部	教授	大江 和彦	
大学病院医療情報ネットワーク研究センター	准教授	石川ひろの	
臓器移植医療部	准教授	長谷川 潔	
環境安全管理室			

中央施設部門

こころの発達診療部	准教授	金生由紀子
組織バンク	准教授	田村 純人
検診部	教授	山崎 力
がん相談支援センター	准教授	野村 幸世
パブリック・リレーションセンター	教授	渡邊 聡明
国立大学病院データベースセンター		
外来化学療法部	教授	黒川 峰夫
病歴管理部	教授	渡邊 聡明
	教授	大江 和彦
救命救急センター	教授	森村 尚登
	准教授	橘田 要一
緩和ケア診療部	准教授	住谷 昌彦
小児医療センター	教授	岡 明
	准教授	藤代 準
災害医療マネジメント部	教授	森村 尚登
国際診療部	准教授	田村 純人
病態栄養治療部	准教授	窪田 直人
看護部		
事務部		

臨床研究部門

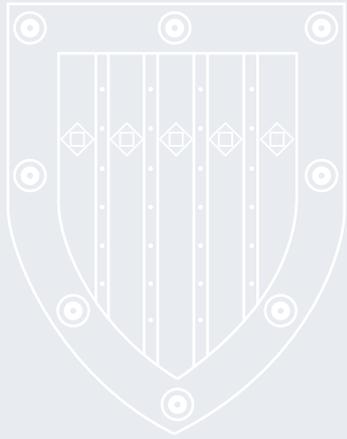
臨床研究支援センター	教授	山崎 力
	准教授	坂中 千恵
22世紀医療センター	教授	高戸 毅
	特任教授	垣見 和宏
ティッシュ・エンジニアリング部	教授	高戸 毅
	准教授	星 和人
医工連携部	教授	小野 稔
トランスレーショナルリサーチセンター	教授	黒川 峰夫
ゲノム医学センター	教授	南學 正臣
早期・探索開発推進室	教授	岩坪 威
人事部	教授	南學 正臣

運営支援組織

地域連携型高度医療人養成推進センター		
医療評価・安全部	教授	佐藤 伸一
医療評価室		
医療安全対策センター	准教授	中島 勸
感染対策センター	教授	森屋 恭爾
患者相談・臨床倫理センター	准教授	瀧本 禎之
高難度新規医療技術評価部	教授	渡邊 聡明
未承認新規医薬品等評価部	教授	佐藤 伸一
教育・研修部	教授	秋下 雅弘
総合研修センター	教授	秋下 雅弘
接遇向上センター	教授	笠井 清登
企画経営部	教授	田中 栄
研究支援部	教授	南學 正臣
臨床研究ガバナンス部	特任教授	森豊 隆志

診療運営組織

入院診療運営部	教授	黒川 峰夫
入退院センター		
がんセンター		
がん診療推進部	教授	宮川 清
外来診療運営部	教授	笠井 清登
中央診療運営部	准教授	住谷 昌彦
バスキュラ・ボード	准教授	住谷 昌彦
周術期管理センター	教授	安原 洋
てんかんセンター		
免疫疾患治療センター	特任准教授	神田 浩子



東京大学大学院 医学系研究科・医学部

大学院 医学系研究科

分子細胞生物学	14
機能生物学	17
病因・病理学	19
生体物理医学	21
脳神経医学	23
社会医学	26
内科学	28
生殖・発達・加齢医学	32
外科学	35
健康科学・看護学	42
国際保健学	46
公共健康医学	49
疾患生命工学センター	53
医学教育国際研究センター	56
グローバルナーシングリサーチセンター	57

教育研究関連施設

国際交流室	58
MD 研究者育成プログラム室	
研究倫理支援室	
ライフサイエンス研究機器支援室	
臨床実習・教育支援室	
医学図書館	
健康と医学の博物館	



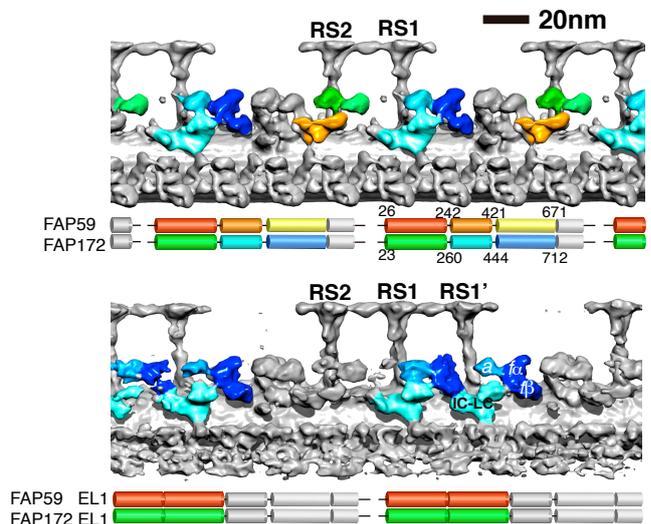
分子細胞生物学 Molecular Cell Biology

生体構造学 *Structural Biology*

<http://structure.m.u-tokyo.ac.jp/>

生体構造学分野（吉川研究室）では、細胞のプロペラでありアンテナでもある鞭毛・繊毛が、どのように形成され、動いているのかを、クライオ電子顕微鏡や超高速カメラを備えた光学顕微鏡、遺伝学、細胞生物学を駆使して理解することを目指している。そのための新しいイメージング技術開発も行っている。

- 鞭毛ダイニンの制御機構
- 微小管関連タンパクの構造
- クライオ電子顕微鏡や超高速カメラからの画像解析法



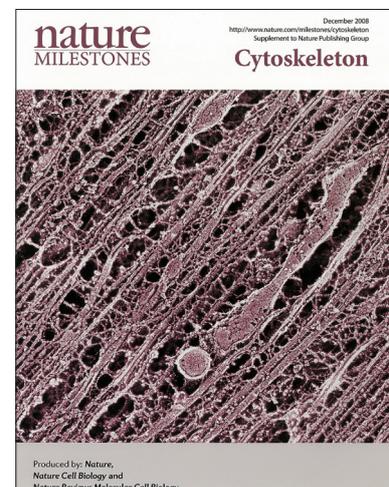
The 3D structures of axoneme visualized by cryo-electron tomography.
Below is the diagram of corresponding "ruler" proteins.

細胞構築学 *Structural Cell Biology*

<http://cb.m.u-tokyo.ac.jp/>

細胞を構築する機能分子、特に細胞骨格、微小管とその関連蛋白の構造と機能を分子細胞生物学、分子遺伝学及び構造生物学を駆使して研究しています。

- 細胞骨格と関連蛋白の構造
- 細胞骨格と関連蛋白の動態
- 細胞骨格と関連蛋白の機能

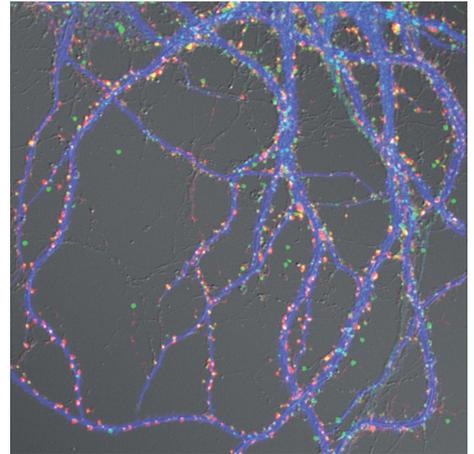


神経細胞内の細胞骨格
(Nature Milestones 2008 より転載)

神経細胞生物学 *Cellular Neurobiology*

神経細胞生物学分野では、神経回路の正常な機能に必須の構造であるシナプスがどのように形成され維持されるのかを理解することを目指している。生きた神経細胞内でのシナプス分子の光学的解析を神経機能の操作を目的とした分子生物学的手法と組み合わせて研究を行っている。

- シナプス後肥厚部の分子構築
- 神経活動によるシナプス改変の分子機構
- グリア細胞によるシナプス形成の調節機構
- 生体内におけるシナプス形成・維持の調節機構
- 精神疾患におけるシナプスの機能障害



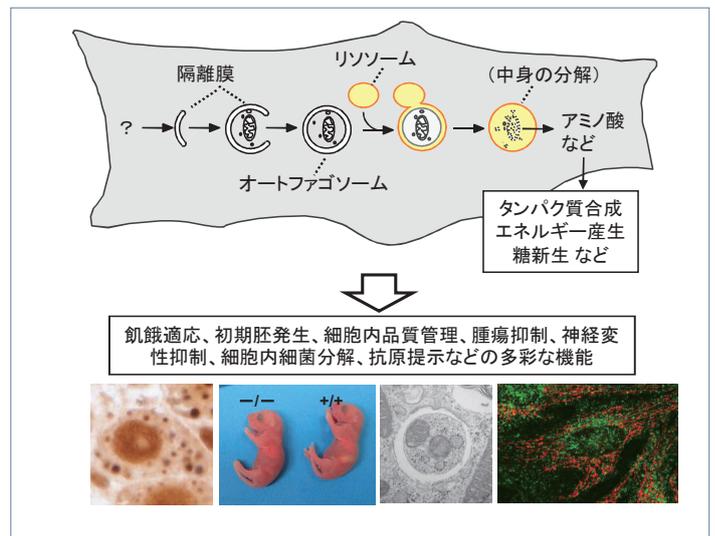
培養海馬神経細胞でのシナプス分子の定量
(緑：シナプス後部蛋白と定量用蛍光ビーズ、
赤：シナプス前部蛋白、青：微小管関連蛋白)

分子生物学 *Molecular Biology*

<http://molbiol.umin.jp/>

細胞内分解システムであるオートファジーの分野横断型研究を通じて、自己タンパク質や細胞内小器官の分解・リサイクルの仕組みと生物学的・病態生理学的意義の解明を目指しています。

- オートファジーの分子メカニズムの研究
(制御機構、膜形成、膜融合、選択性など)
- オートファジーの代謝生理学的意義の研究
- 細胞内品質管理機構としてのオートファジーの研究
- オートファジーのモニター方法および制御方法の開発

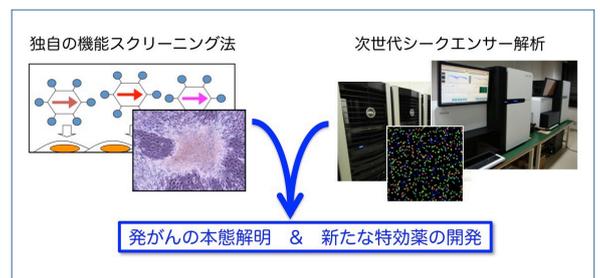


細胞情報学 *Cellular Signaling*

<http://mano-lab.umin.jp>

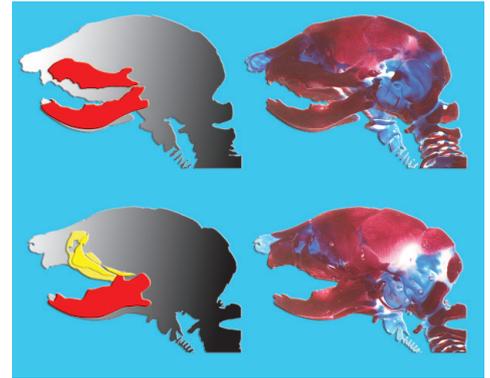
独自の高感度機能スクリーニング法と次世代シーケンサー解析とを組み合わせたアプローチによって、発がんの本質的原因を明らかにし、新たな分子標的治療法を開発する。研究活動は「ゲノム医学寄付講座」と密接に連携して進めている。

- 発がんの本質的遺伝子異常の解明
- がんの新規治療標的の同定
- がんの分子診断法開発

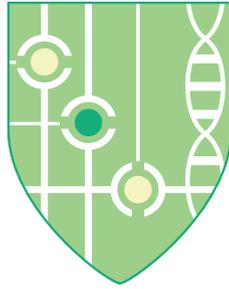


受精から胚形成、器官形成に至る個体発生について、分子細胞生物学・発生工学を中心に、細胞の運命決定や「かたちづくり」を制御するシグナル機構の解明に取り組んでいる。

- 神経堤細胞の発生分化と頭部・顔面の形成機構
- 心臓・血管の形成機構
- 初期発生におけるストレス応答の分子機構
- 発生におけるノンコーディング RNA の役割



エンドセリン-1 遺伝子ノックインマウスにおける上顎構造の下顎化（上）、下は同腹の正常マウスの骨格



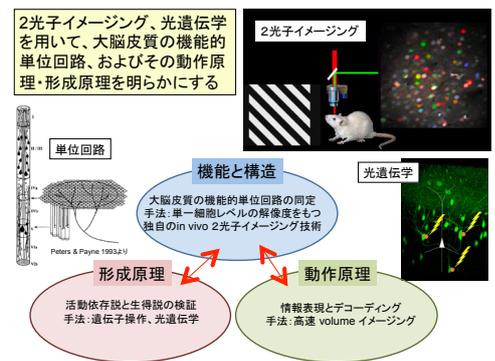
機能生物学 Functional Biology

統合生理学 *Integrative Physiology*

<http://www.physiol2.med.kyushu-u.ac.jp/>

大脳皮質は、外界から情報を受け取り、それを処理することによって、複雑な反応選択性を獲得していますが、実際にどのような神経回路によって、この情報処理がなされているかについては、依然としてわかっていません。近年、イメージング技術の進歩（2光子励起法）により、生体から数千個の神経細胞の活動を同時に計測することが可能になりました (Ohki et al., 2005, 2006)。他にも、神経回路を調べる技術が続々と開発されていて、神経科学の研究は変革期を迎えつつあります。当分野では、これらの最新の手法を使って、哺乳類の視覚野の神経回路が、どのように情報処理を行っているのかを調べようとしています。

- 視覚野の機能的・解剖学的な神経回路の解明
- 視覚野の神経回路の発生
- 神経細胞の集団による情報表現
- 神経細胞の種類による視覚情報処理への役割

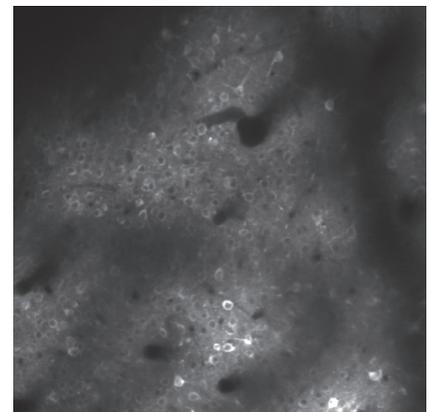


細胞分子生理学 *Cellular and Molecular Physiology*

<http://plaza.umin.ac.jp/~Matsuzaki-Lab/>

運動や思考を創発する前頭皮質の神経回路について研究しています。2光子イメージング、光遺伝学、電気生理学などを課題実行中のマウスやマーモセットに適用して、多数の神経細胞の活動を計測・操作し、多細胞活動ダイナミクスの解析を行っています。

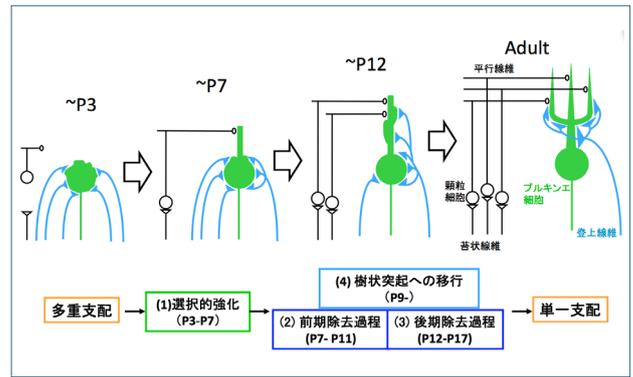
- 運動学習・運動発現を実現する神経回路
- 意思決定を実現する神経回路
- ブレイン・マシン・インターフェースを実現する神経回路
- 新規の蛍光顕微鏡技術の開発



カルシウム感受性蛍光タンパク質を発現したマウス運動野の2光子画像

脳機能の基盤をなすシナプスの働きとその生後発達、学習、記憶に伴う変化について研究しています。ニューロンの活動をリアルタイムで観察するために、電気生理学、分子生物学、機能分子イメージング等の様々な手法を用いています。

- 小脳のシナプス機能と回路構造の生後発達
- 内因性カンナビノイドによる逆行性シナプス伝達調節
- 個体脳におけるシナプス統合
- 小脳シナプス可塑性と運動学習

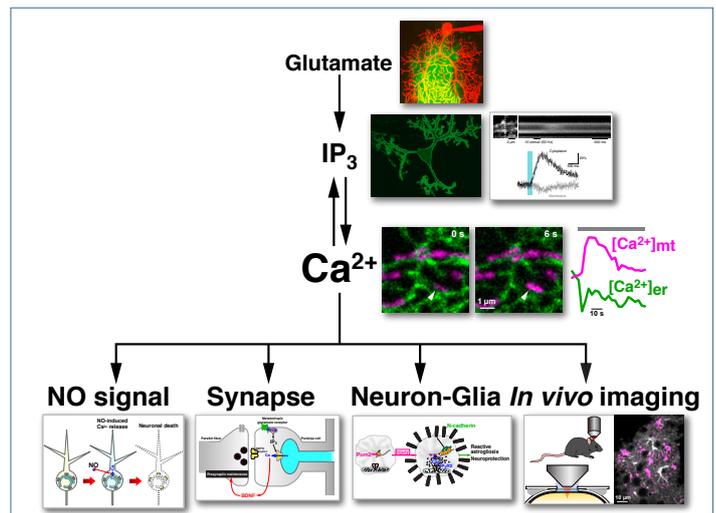


小脳登上線維—プルキンエ細胞シナプスの生後発達

細胞分子薬理学 *Cellular and Molecular Pharmacology*

生命において重要な信号伝達機構である細胞内カルシウムシグナルについて、基本機構の解明を目指しています。さらにそれを基盤として、カルシウムシグナルの未知機能を中枢神経系で探索するとともに、シグナル分子イメージング法を駆使して脳機能の理解に迫りたいと考えています。

- カルシウムシグナルの基本機構の研究
- カルシウムシグナルにより制御される未知機能の探索
- シグナル分子イメージング法による神経細胞およびグリア細胞の機能解析



当研究室の Ca²⁺ シグナル研究の概要

システムズ薬理学 *Systems Pharmacology*

睡眠・覚醒サイクルをモデル系として脳の多様な状態やホメオダイナミクスが神経細胞の持つ静止膜電位の負のフィードバック制御や中枢神経回路構造の知見からどのように理解・制御されるかに迫ります。また、個体レベルでの定量的解析・摂動を行うために必要なゲノム改変技術・高速ゲノム改変マウス作製技術確立し、それを個人ゲノム解析に結びつけることで臨床から始まる基礎研究の道筋を確立します。

- 睡眠・覚醒リズムの動作原理の解明
- 高速ゲノム改変マウス作製技術
- 個人ゲノム解析を通じた臨床から始まる基礎研究

睡眠・覚醒リズムの解明を通して
個体レベルのシステム生物学を確立する

<p style="text-align: center; color: blue; font-weight: bold;">睡眠・覚醒リズムの動作原理を解明する</p> <p style="font-size: small;">PCO1 中枢神経系は覚醒を経て睡眠(NREM-REM)に至る</p> <p style="font-size: x-small;">量の変動なのか？ 質の変動なのか？ (e.g. 神経伝達物質の濃度変動) (e.g. シナプス受容体の修飾状態)</p> <p style="font-size: x-small;">覚醒の履歴はどのように記録されているのか？</p>	<p style="text-align: center; color: green; font-weight: bold;">交配なしのマウス遺伝学を確立する</p> <p style="font-size: x-small;">高速・並列ゲノム改変 最先端の発生工学技術</p> <p style="text-align: center; font-weight: bold; color: green;">3ヶ月</p> <p style="font-size: x-small;">~100% ES細胞由来マウス</p> <p style="font-size: x-small;">キメラ世代での表現型解析や 非侵襲測定・非接触摂動を実現</p>	<p style="text-align: center; color: orange; font-weight: bold;">臨床から始まる基礎研究を確立する</p> <p style="font-size: x-small;">ヒトで疾患関連遺伝子を同定し モデル動物で因果を証明する</p>
---	--	---

生命システムの多階層間、多分野間(物理・化学・情報・工学・医学)、
臨床・基礎間を自在に行き来し、生命システム理解を目指す。



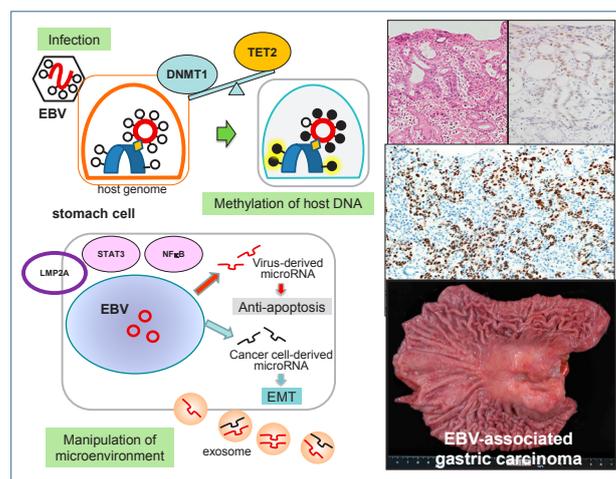
病因・病理学 Pathology, Immunology and Microbiology

人体病理学・病理診断学 Pathology and Diagnostic Pathology

<http://pathol.umin.ac.jp/>

がんを始めとした病気の成り立ち、振る舞いを、形態学を通して研究している。病理診断（生検、細胞診、手術標本）、病理解剖により臨床医学に治療指針を提供する一方、臨床との対話を基に新たな病気・病態を発見することが目標である。

- 慢性炎症と腫瘍
 - Epstein-Barr ウイルス関連胃癌
 - 癌のエピジェネティクス（DNA メチル化、microRNA）
 - 幹細胞と上皮間質相互作用
 - 個別化医療を目指した癌組織分類（胃、肝臓、泌尿器、肺）
- 分子病理学の病理診断への応用
 - ゲノム病理学、クリニカルシーケンシング
 - 癌治療標的分子の探索
 - プロテオーム病理学
- 次世代の病理診断
 - 遠隔病理診断、デジタルパソロジー、人工知能の応用
 - CPC 教育の推進

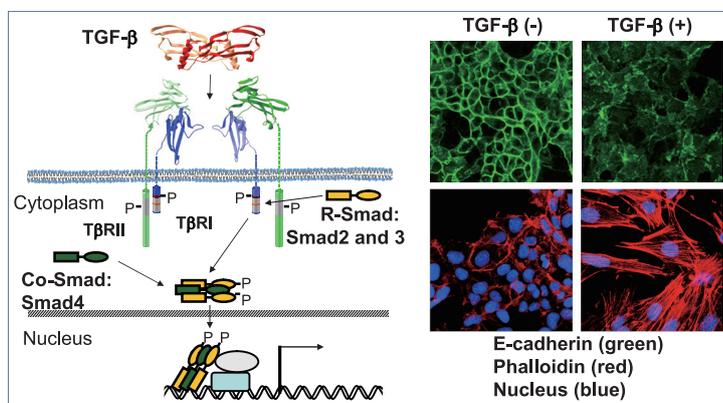


分子病理学 Molecular Pathology

<http://beta-lab.umin.ac.jp/>

TGF-β ファミリーのサイトカインのシグナル伝達機構を明らかにし、がんの進展との関連を解明する。ゲノムワイドに TGF-β ファミリー-Smad の標的遺伝子の調節機構を明らかにする。これらの成果を基盤に、がん治療の新たな戦略を確立する。

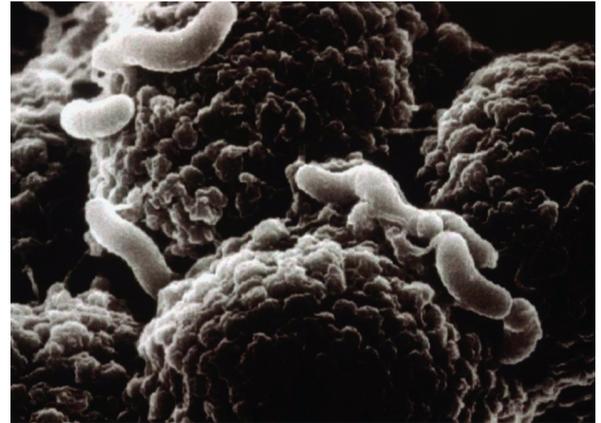
- TGF-β-Smad のダイナミックな転写調節機構の解明
- TGF-β による上皮-間葉転換（EMT）の調節機構
- TGF-β ファミリーのがん幹細胞に対する作用
- 同所移植細胞の樹立によるがん微小環境の研究



TGF-β によるシグナル伝達経路（左）と乳腺上皮細胞の EMT（右）

ヘリコバクター・ピロリ感染を起点とする胃がん発症の分子機構を主要テーマに研究を進めている。得られた成果を、ヒト全がんの半数を占める感染・炎症がんの制圧に向けた新たな予防・治療法開発につなげる。

- ピロリ菌発がんタンパク質 CagA の構造生物学的解析
- CagA が標的とする細胞内シグナル系の解明
- 胃がん機構のマウス遺伝学的解析
- 胃がん感受性を規定する宿主側遺伝的要因の解析
- 炎症と発がんを繋ぐ分子機構解明とその遮断によるがん予防



胃上皮細胞に付着するピロリ菌

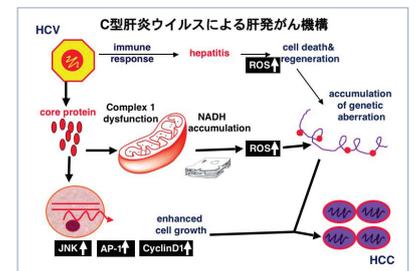
感染制御学 *Infection Control and Prevention*

感染制御学は医療関連感染（healthcare-associated infection）の制御を目的とした臨床活動と、肝炎ウイルスや HIV による感染症、日和見感染症、宿主の免疫反応を主な対象とした研究活動を行なっている。感染症に対する、先手を打ったトータルな感染対策の確立を目指している。

- 医療関連感染制御の組織的方法の確立
- 肝炎ウイルスに対する感染制御・治療法の開発
- C 型肝炎ウイルスによる肝発がん機構とその抑制法の開発
- HIV 感染症の進展に関する研究
- ウイルス感染症におけるミトコンドリア機能障害機構
- B 型肝炎ウイルスによる病原性発現機構の解析
- 日和見 CMV 感染症の新規診断法開発と病態解明
- 細菌による血球細胞の活性化機序の解析
- 病原体感染時の自然免疫応答機構の解析
- 多剤耐性菌出現機構
- クロストリジウム ディフィシルの分子疫学解析



感染制御チームラウンド

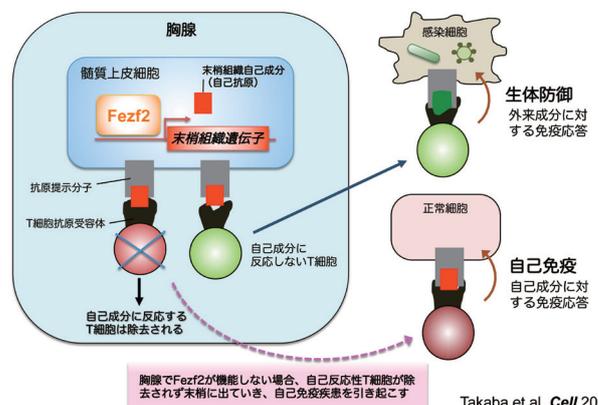


免疫学 *Immunology*

免疫細胞の分化過程や自然免疫・適応免疫の制御機構を分子レベルで解析し、免疫反応を統合的に理解するとともに、免疫疾患に対する新規治療法の開発に繋げることをめざします。特に、自己免疫疾患に寄与する分子や免疫細胞に焦点を当て、遺伝子改変マウスを用いた生体レベルでの検証を重視しています。

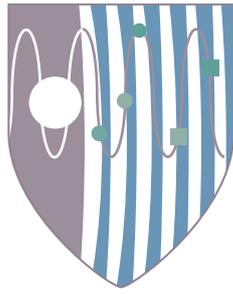
- ゲノム編集技術による免疫細胞の検出・解析モデル動物の開発
- 免疫細胞の発生・分化を制御する分子機構の解明
- 免疫細胞の分化と機能の場としての免疫組織微小環境の解明
- 自己免疫疾患の発症機構と病態の解明
- 免疫系による骨代謝制御とその破綻による疾患の研究
- 骨髄における免疫細胞の維持機構の解明

自己免疫寛容の分子メカニズムの解明



胸腺でFezf2が機能しない場合、自己反応性T細胞が除去されず末梢に出ていき、自己免疫疾患を引き起こす

Takaba et al, *Cell* 2015



生体物理医学

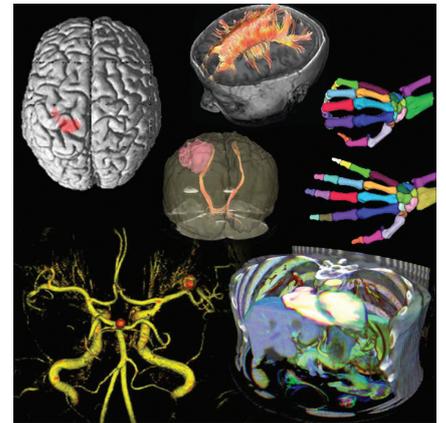
Radiology and Biomedical Engineering

放射線医学 (放射線診断学、放射線治療学、核医学) *Radiology*

<http://www.ut-radiology.umin.jp/>

21世紀を迎え、コンピューター支援なくしては診断・治療の効率化、高精度化は成しえない現在、放射線医学教室では、各種画像情報の取得・抽出・解析による診断、治療支援に関する研究を多角的な方面から行っている。

- 放射線診断学
 - 脳動脈瘤の自動検出、肺疾患の自動診断のための画像解析
 - MR 拡散画像 / 安静時 fMRI に基づく脳内ネットワーク解析
 - 肝臓形状、機能モデリング手法の開発
 - 関心領域法または voxel-base 解析による脳機能解析
- 放射線治療学
 - 強度変調放射線治療 (Intensity modulated radiotherapy: IMRT) および定位放射線照射 (ガンマナイフ・シナジー) に基づく放射線線量分布の最適化
 - 放射線障害の軽減を目的とした臨床的・生物学的研究
- 核医学
 - ポジトロン CT (PET) を用いた脳内異常凝集蛋白 (アミロイド、リン酸化タウ蛋白等) 検出法の開発
 - ドーパミン、セロトニン系神経伝達機能測定、脳活動時の内因性神経伝達物質放出量測定法の開発
 - アミノ酸、糖、核酸代謝、抗体イメージングによるがん診断法の開発
 - がん特異性蛋白を標的とした放射線免疫療法 (RIT) の開発



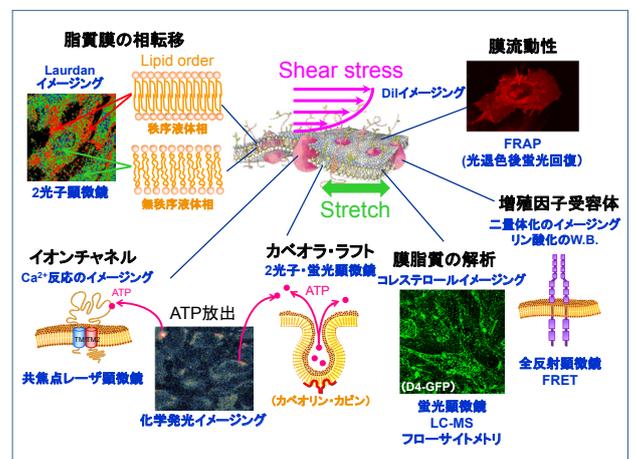
コンピューター支援技術を用いて解析された代表的画像

システム生理学 *System Physiology*

<http://square.umin.ac.jp/bme>

生体の力学的現象を扱うバイオメカニクス、とくに細胞に加わる力学的刺激とその刺激に対する細胞の感知・応答機構に焦点を当てたメカノバイオロジー研究を行っている。血流や血圧に起因する力学的刺激である流れずり応力 (shear stress) や伸展張力 (cyclic stretch) と、それが作用する血管内皮細胞の機能との関係を探り、循環機能調節や、血流依存性に起こる血管新生やリモデリングの分子機構を明らかにする。さらに、ヒトの粥状動脈硬化症や脳動脈瘤の発生といった臨床医学的に重要な問題の解明への道筋を確立する。

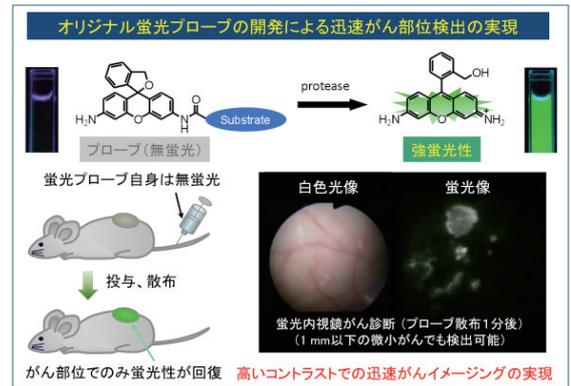
- 血流刺激の感知・情報伝達機構
- 血流刺激に対する細胞応答
- 血流刺激による遺伝子発現制御機構



血管内皮細胞におけるメカノセンシング機構の解析

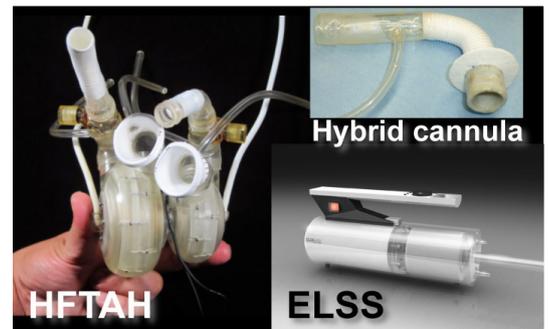
生細胞内、動物個体内で起こる様々なイベントを、高感度に可視化するオリジナル有機小分子蛍光プローブの設計・合成・開発を中心に、全く新しい生体分子イメージング技術の創製を目指したケミカルバイオロジー研究を行っています。最近開発に成功した *in vivo* 微小がん部位検出を可能とする蛍光プローブについては、外科医と協同して、ヒト摘出サンプルでのライブイメージングも試みています。

- 光機能性プローブの論理的精密設計法の確立
- 新規蛍光プローブ、増感プローブ、ケージド化合物の開発とその生物応用
- 開発した光機能性プローブの応用による、*in vivo* がんイメージング・治療

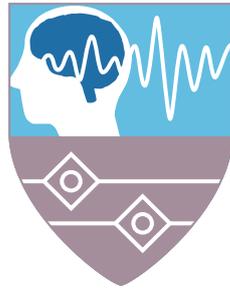


人工臓器を中心として先端 ME (Medical Engineering) 診断治療技術に関する幅広い研究と開発を行っています。特に人工心臓の研究では、最新型の螺旋流完全人工心臓の完成度が向上し、ヤギに装着して3か月以上の生存を得るに至りました。また、現場で使用できる救急救命用機器として、心肺機能が停止しても一定期間生命を維持する小型な緊急生命維持装置の開発を進めております。他にも、生体適合性材料、センサー、新しい診断機器および体内埋込式人工腎臓などの研究も行っております。

- 人工心臓
- 緊急生命維持装置
- 生体材料と人工材料のハイブリッド化技術
- 新しい血液ポンプ
- 体内埋込圧センサー
- 体内埋込式人工腎臓



螺旋流完全人工心臓 (HFTA)、ハイブリッドカニューレおよび小型緊急生命維持装置 (ELSS)

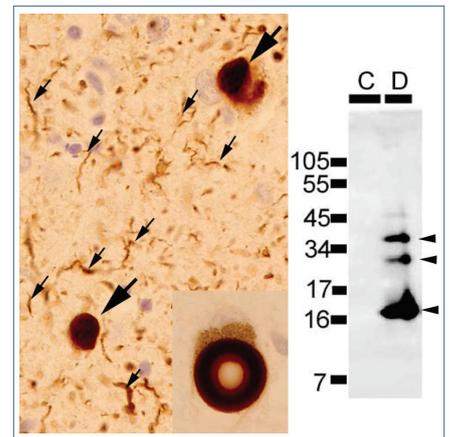


脳神経医学 Neuroscience

神経病理学 *Neuropathology*

アルツハイマー病、パーキンソン病などの代表的な神経変性疾患における細胞変性・細胞死の機序の解明と治療法開発を目的に研究を行っている。

- γ セクレターゼの構造と機能の解明
- γ セクレターゼ阻害薬の作用機構の解析
- アミロイド β ペプチドの産生・蓄積・クリアランス機構の研究
- アミロイド結合蛋白質 (CLAC など) の病的機能の解析
- α シヌクレインの蓄積・毒性機構の解明
- 家族性パーキンソン病遺伝子 LRRK2 の機能解明
- アルツハイマー病根本治療薬実用化ストラテジーの確立 (J-ADNI 臨床研究の推進)



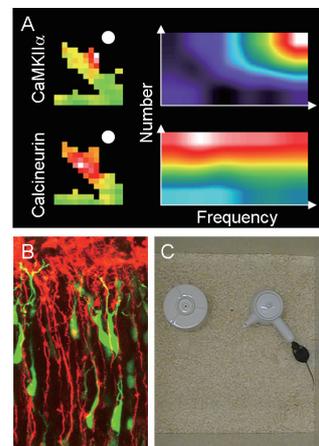
パーキンソン病・Lewy 小体に蓄積したリン酸化 α シヌクレインの同定

神経生化学 *Neurochemistry*

神経回路は、神経細胞の結合と機能的なシステム形成のための厳格な「設計図」と、個体ごとに内部・外部の環境変化に刻一刻と対応しその経験を蓄積できる「適応性・学習能力」という、「剛」と「柔」の性質を併せ持つ。本分野ではこうした特性から高次脳機能が生まれる仕組みを分子、シナプス、遺伝子発現、神経回路レベルで明らかにしている。

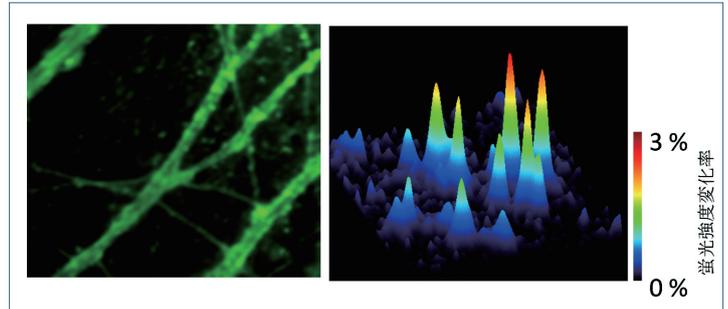
- CREB-Arc シグナリングの解読に基づく長期記憶回路の同定・解析・操作
- 情動行動制御に関与する回路・分子機構の解明
- CaM キナーゼファミリーの分子生物学
- 単一シナプス内、およびシナプスから核へのシグナリングの可視化と操作
- 神経突起形成、大脳皮質・回路形成の分子シグナリング機構の解明
- マウス個体における細胞内シグナリングイメージング法の開発

<http://www.neurochem.m.u-tokyo.ac.jp/>



- A. CaMKII α とカルシニューリンの単一シナプス計測 (左) と入力頻度・回数応答性 (右)
B. 大脳皮質形成時の移動中神経細胞 (緑) と放射状グリア線維 (赤) の可視化
C. 新規物体認識課題

本研究室では、グルタミン酸イメージング技術をはじめとした細胞機能可視化のための独自技術を開発し、生理学実験に駆逐することで中枢神経系を中心とした生理機能の制御機構の解明を目指している。現在は、ケミカルバイオロジーや化学、分子生物学等の手法を融合させ、分子タグや超解像イメージング、Ca²⁺ イメージングの新規基盤技術の開発・応用を行っている。



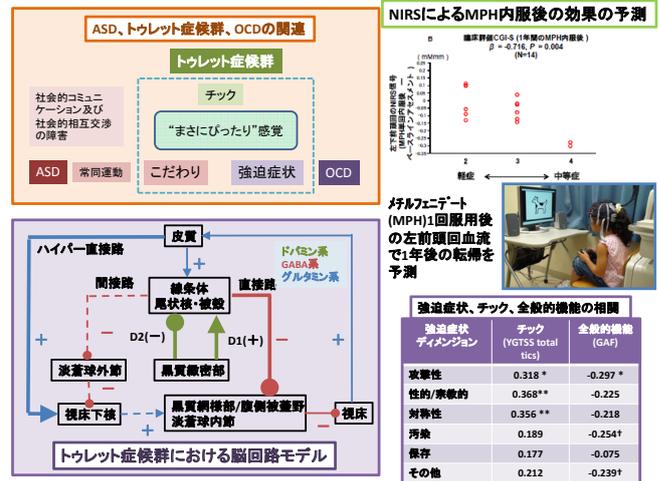
新規に開発したグルタミン酸プローブによる培養海馬神経細胞のシナプスからのグルタミン酸放出の可視化

こころの発達医学 Child Neuropsychiatry

自閉スペクトラム症 (ASD) や注意・欠如多動症 (ADHD) などの発達障害をはじめとするこころの発達の問題は増加の一途をたどっており、脳神経医学の視点から臨床と研究を結びつけることが求められています。

ASD、ADHD、重症なチック症であるトゥレット症候群、児童思春期強迫症 (OCD) を主な研究対象として、科学的な臨床評価に基づく精神・行動指標の解析、神経心理、脳神経画像や遺伝子など多面的なアプローチを統合して脳とこころの発達における問題に取り組みます。

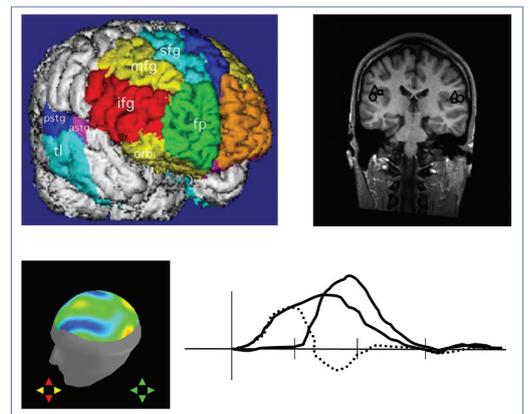
- トウレット症候群、児童思春期 OCD の臨床評価・神経心理の検討及び遺伝研究
- ASD、ADHD、トゥレット症候群に関する MRI、fMRI、NIRS を用いた脳画像解析
- ASD、トゥレット症候群の遺伝・環境要因の検討
- ADHD に対する薬物療法及びペアレントトレーニングの効果予測指標の開発
- ASD の治療教育及び集団認知行動療法の効果の検討



精神医学 Neuropsychiatry

精神疾患は社会経済コストが非常に高く、その克服は国民の最大の関心事です。当教室では、統合失調症および発達障害を主要な克服対象とし、神経画像・遺伝子・動物実験を組み合わせた生物学的なアプローチに、こころの発達診療部やデイホスピタルのフィールドを生かした心理社会的アプローチを加えた統合的な研究を、長期的な視野にたって展開します。以下の研究を手がけ、当事者の利益に結実させていきます。我が国の精神医学研究に不足している、臨床研究体制や研究者教育プログラムの整備、基礎神経科学研究との連携についても積極的に推進します。

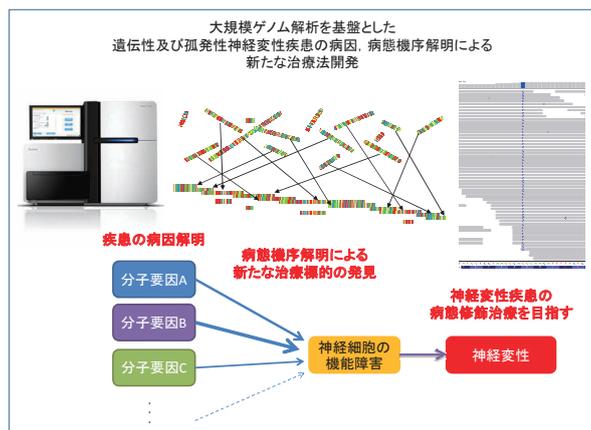
- 統合失調症の前駆状態から初発統合失調症に至る時期の縦断研究 (Integrated Neuroimaging studies in Schizophrenia Targeting Early intervention and Prevention; IN-STEP; <http://plaza.umin.ac.jp/arms-ut/>)
- 発達障害の総合的研究
- 医療機器を薬剤選択・薬効予測の臨床検査法として確立するための臨床試験 上記を中心とした画像、遺伝学研究、コホート、基礎研究など



高解像度マルチモダリティ・ニューロイメージングを用いた精神疾患の脳病態解明

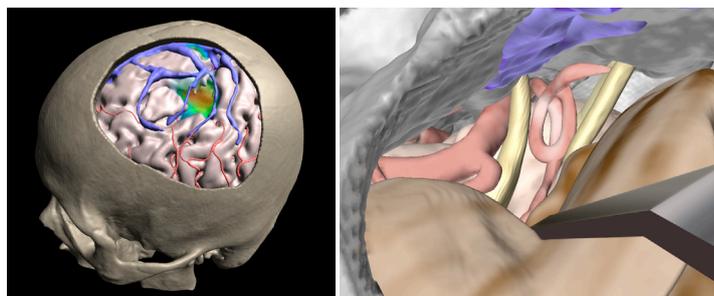
高齢化社会の到来に伴い、認知症性疾患の急増など神経内科医のニーズはますます高くなってきている。神経内科学教室では、神経内科専門医の育成を行うと共に、神経変性疾患、免疫性神経疾患、神経筋疾患などの病態の解明、治療法の開発に向けて、分子レベルからシステムレベルにいたる幅広い先端的な研究を推進している。

- 分子遺伝学的研究（疾患遺伝子の解明、病態機序の解明、治療法の開発）
- 神経疾患の病態機序に関する生化学的研究（タンパク構造・機能解析）
- 神経疾患の免疫学的研究（自己抗体、糖鎖解析）
- 神経生理学的研究（磁気刺激、近赤外線、脳磁図、PET、fMRI）
- 病理学的研究（生検・部検材料、顕微鏡・電顕的免疫組織化学、画像解析）
- 多施設共同研究（臨床研究）
- 新規治療戦略の開発

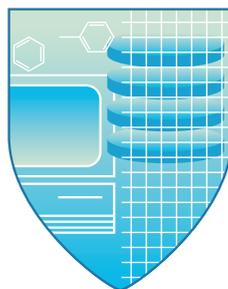


脳の世紀といわれる21世紀において、神経科学を外科的な側面から追究すべく臨床・研究・教育を行っている。頭蓋底腫瘍や悪性神経膠腫等の集学的治療に代表される高度な臨床医療、また臨床から派生する脳腫瘍や脳血管障害の実験的研究を行っている。

- 治療困難な良性・悪性頭蓋底腫瘍・頭蓋底血管病変に対する治療法の開発
- てんかんを含めた機能脳神経外科治療の開発
- 脳腫瘍のマルチオミクス解析（遺伝子解析）
- 悪性脳腫瘍に対する新規治療法の開発
- ガンマナイフの臨床研究
- 脳神経外科手術における脳機能画像の研究
- VR技術を用いた手術シミュレーション法の開発
- 虚血性神経細胞死のメカニズムの解明
- 脳血管内治療用ステントの開発



三次元融合画像を用いた手術シミュレーション



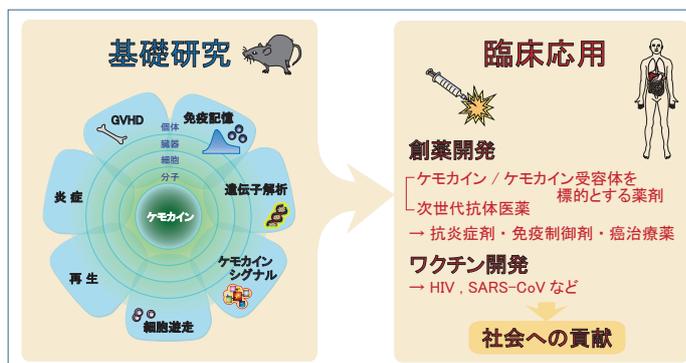
社会医学 Social Medicine

分子予防医学 *Molecular Preventive Medicine*

<http://www.prevent.m.u-tokyo.ac.jp/>

免疫担当細胞はリンパ組織と末梢組織の間を機能や役割を変えながら刻々と移動し免疫システムを構築している。各種病態の背景には、免疫担当細胞による末梢の組織細胞の量的・質的变化が存在する。免疫担当細胞の生体内遊走を制御するケモカインを中心に、炎症・免疫反応制御機構の解明により各種病態・疾患の治療・予防（ワクチン開発）への端緒を見出すことを目指す。

- 慢性炎症に伴う臓器線維化の分子・細胞基盤に関する研究
- ケモカインによる炎症・免疫反応機序の解明とそれに基づく疾患（GVHD、腫瘍、感染症、自己免疫疾患）治療・予防戦略の提示
- 癌・感染症に対するワクチン開発



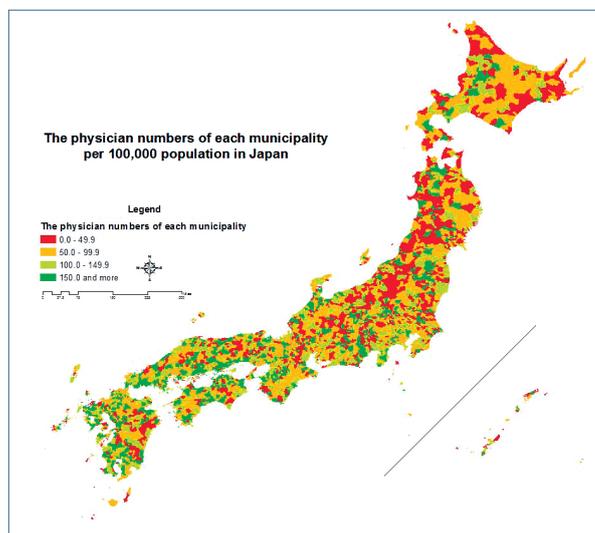
公衆衛生学 *Public Health*

<http://publichealth.m.u-tokyo.ac.jp/>

公衆衛生学は、社会の組織的な取り組みによって、人々の健康やQOLを維持・増進する実践活動のための知識や技術の総体です。本分野ではこの特長に沿い、国内外のフィールドでの調査活動と研究室での実験的・数量的分析の有機的関係を重視しつつ教育・研究を進めています。

- 医療制度の効率性と公平性に関する実証研究
- 医療従事者の需給に関する研究
- 職域・環境における健康障害やその要因の測定と疫学研究
- 医療サービスの効果・効率・質に関する研究

全国自治体における医師分布



異状死の解剖・組織検査・生化学検査・CT検査・中毒検査・DNA検査などを実務として従事するほか、下記の研究を千葉大学大学院医学研究院附属法医学教育研究センターなどと協力して行っている。

- 危険ドラッグを含む違法薬物の検出に関する研究
- 死因究明のために、CT、MRIなどの画像診断機器を応用する研究
- CTを用いた年齢・身長推定及び性別判定の検討
- ヒトの組織の力学的特性に関する研究
- 溺死診断の質の向上に関する研究
- 新しいDNA検査法の、法医学実務への応用に関する研究



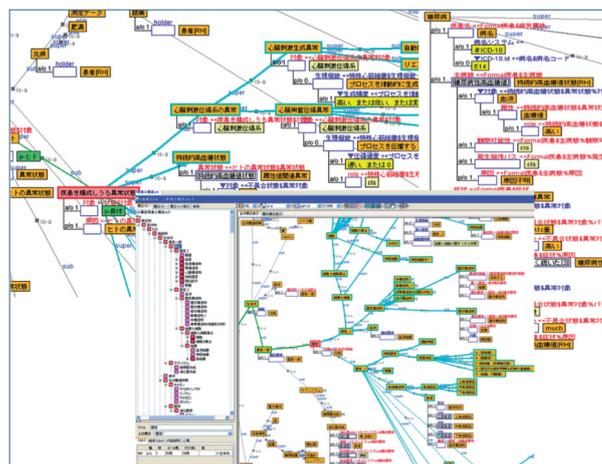
CT室



法医解剖室

研究教育部門は大学院講座、実務部門は東大病院の企画情報運営部として全体が一体で運営されており、講師以上のスタッフは事実上両方を担当している。公共健康医学専攻医療情報システム学教室とも兼務であり、主として以下のテーマで教育研究を行っている。また病院の医療情報管理の実務部門として医療情報システムの開発、運営をおこなうと同時に、情報技術の医療への先進的応用、技術評価、医療情報の標準化領域での実践活動を行っている。

- 臨床医学オントロジーの研究開発との臨床応用
- 医療情報データベースの施設間共有と臨床疫学応用
- 自然言語処理技術による医療データの知識抽出
- リアルタイム医療安全監視警告システムの研究開発
- 医療機関経営評価と医療資源配置分析



臨床医学オントロジーの構築



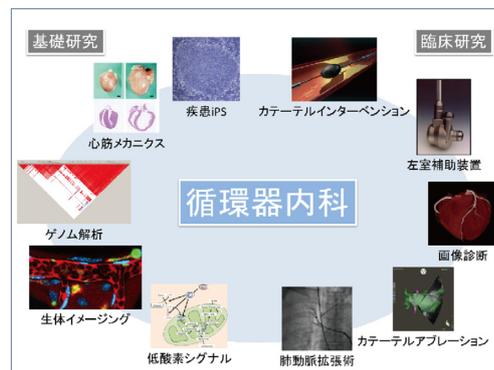
内科学 Internal Medicine

循環器内科学 *Cardiovascular Medicine*

<https://cardiovasc.m.u-tokyo.ac.jp/>

当科では、虚血性心疾患、不整脈、弁膜症、肺高血圧症、成人先天性心疾患、大動脈疾患など、どの分野においても最高・最良の診療を目指しています。とりわけ心不全に関しては、我が国で最も多くの重症な患者を診療しており、心臓外科との緊密な連携のもと“最後の砦”になるべく努力しています。一方で、まだ十分な診断・治療ができない疾患に対しては、基礎研究、トランスレーショナル研究を行い、新しい診断法・治療法の開発を目指しています。

- 病態の解析と新規治療法の開発（心不全、マルファン症候群、肺高血圧症など）
- 循環器疾患におけるゲノム・エピゲノム・トランスクリプトーム解析
- 疾患 iPS 細胞を用いた心筋症の病態解明
- 循環器疾患発症における慢性炎症の役割解明
- 種々の疾患における血管内皮機能障害の研究
- データベース構築による診療情報活用と研究への応用
- 循環器疾患の画像診断の研究（心エコー図、MRI、CT、核医学など）
- 重症心不全、肺高血圧症、不整脈の臨床研究

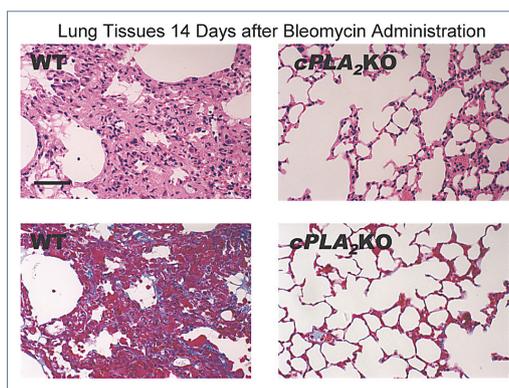


呼吸器内科学 *Respiratory Medicine*

<http://kokyuki.umin.jp/>

肺癌や慢性閉塞性肺疾患（COPD）など呼吸器疾患の患者数は今後、飛躍的に増加することが予想され、呼吸器領域の研究成果が期待されている。教室では肺癌、気管支喘息、COPD など多様な呼吸器疾患を対象として基礎・臨床研究を展開している。特に呼吸器疾患の発症分子機構の解明を進めることにより、新治療法の開発・実現化を目指している。

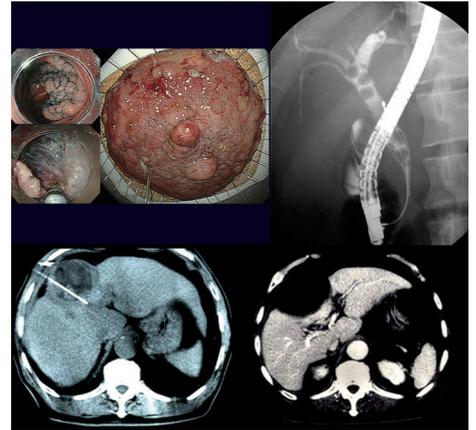
- COPD、気管支喘息、肺線維症に関する臨床研究
- びまん性汎細気管支炎（DPB）や間質性肺疾患の疫学
- 急性肺障害、ARDS の発症分子機構の解明
- 肺線維症の発症分子機構の解明（図を参照）
- 遺伝子改変マウスを用いた疾患モデルの解析
- 気道上皮、平滑筋、線維芽細胞などにおけるケモカイン、サイトカイン、エイコサノイドの役割
- 肺癌および炎症性肺疾患における上皮間葉転換の分子機構の解析
- DNA メチル化と肺癌
- siRNA ノックダウンベクターの開発
- CpG island searcher の確立
- 肺癌および炎症性肺疾患におけるバイオマーカーの探索



肺線維症のマウスモデル

消化器内科疾患、特に原発性及転移性肝癌に対する経皮的治療、消化管腫瘍や胆道・膵臓の腫瘍・結石に対する内視鏡的治療については、その実績は世界的にもトップランナーの一施設であると自負している。これらの難治疾患に対して、より正確な診断と最適な治療法の確立を目指し、臨床研究はもとより、動物モデル作製、遺伝子・蛋白質情報の網羅的検索など多岐に亘る基礎研究を遂行している。

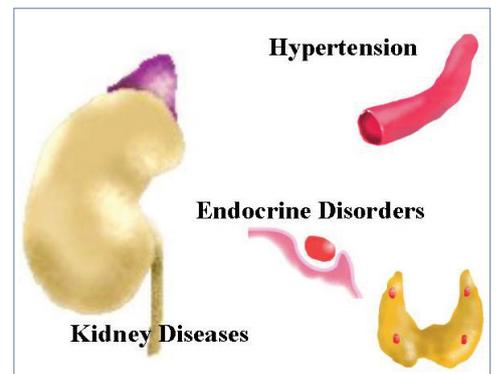
- B型・C型肝炎に対するより良い治療法の開発
- ウイルス肝炎における肝発癌機序の解明
- 肝細胞癌・転移性肝癌に対するより良い治療法の開発
- ヘリコバクター・ピロリによる胃粘膜障害機序の解明
- 消化器癌の幹細胞と発癌機構の解明
- 進行胆道・膵臓癌に対するより良い治療法の開発
- 胆道・膵臓の腫瘍・結石に対するより良い内視鏡的治療法の開発
- 慢性炎症に対するより良い診断及治療法の開発
- 早期胃癌・食道癌・大腸癌に対する内視鏡的一括切除法の開発
- 代謝関連肝疾患発生機序の解明
- 小腸疾患に対するより良い診断及治療法の開発



腎臓内科学／内分泌病態学 Nephrology/Endocrinology

腎臓および内分泌疾患の病態生理を形態学・生理学・免疫学・分子生物学などから多面的に解析し、診断・治療への展開を目指している。

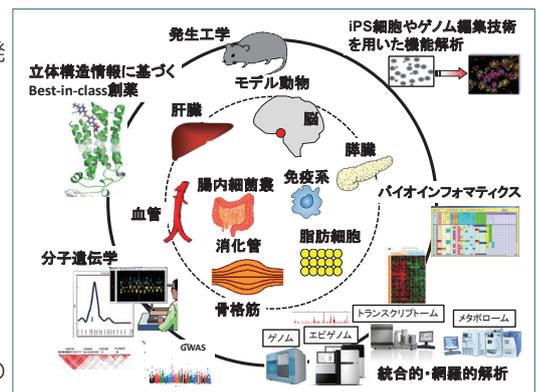
- 慢性腎臓病の病態の解析と治療法の開発
- 腎臓病の酸素代謝異常
- CKDにおけるエピジェネティック変化
- 急性腎障害のバイオマーカーと治療法の開発
- 腎生理と組織形態学
- G蛋白質シグナルと疾患
- ミネラルと骨に関わる疾患の臨床的・基礎的研究
- 高血圧の病態生理



代謝・栄養病態学 Nutrition and Metabolism

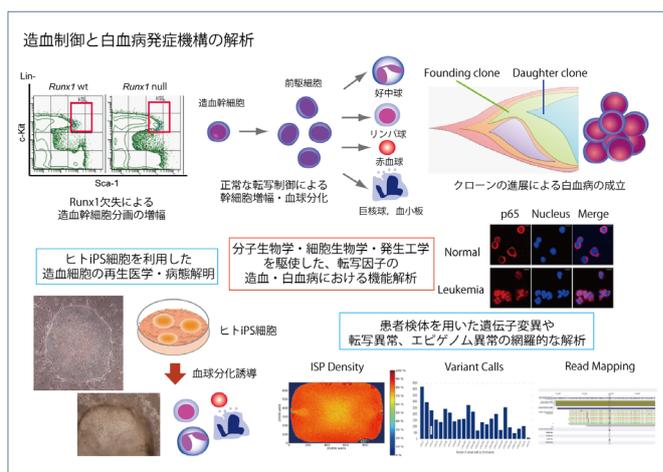
当科では糖尿病、脂質代謝異常、肥満症、メタボリックシンドローム、動脈硬化といったさまざまな代謝疾患の分子機構の解明に力を入れている。解明には発生工学的手法を用いて作製したモデル動物やiPS細胞、エピゲノム、メタボローム等の統合的・網羅的解析等の最先端技術や分子遺伝学、臨床疫学、バイオインフォマティクスなどの最新情報学を用いた総合的なアプローチを用いている。最終的にはそれぞれの病態の分子機構に根ざした根本的な治療法と予防戦略を見出すことを主題としている。

- 肥満に関連したインスリン抵抗性の分子メカニズム解明と新規治療法開発 (AdipoR 等)
- エピゲノム解析による2型糖尿病や肥満症の発症機構解明
- 疾患iPS細胞を用いた代謝疾患の病態解明と治療法開発
- インスリンシグナル伝達の分子機構
- 2型糖尿病におけるインスリン分泌不全の分子機構
- 2型糖尿病の感受性遺伝子とリスク因子
- 2型糖尿病の正確な診断アルゴリズムの発展
- 脂肪蓄積と肥満の分子機構
- 脂質代謝の転写制御機構
- 動脈硬化の分子機構
- 糖尿病・脂質代謝異常・動脈硬化の発生工学的な手法を用いたモデル動物の作製・解析



白血病、悪性リンパ腫などの造血器悪性腫瘍や骨髄異形成症候群、再生不良性貧血などの造血障害性疾患を含む多岐にわたる造血器疾患の発症機構、診断および治療に関する基礎的・臨床的研究を、分子生物学、細胞生物学、発生工学、ゲノム科学などの手法を多面的に用いて行っている。造血細胞の転写制御、シグナル伝達、造血幹細胞の制御機構の解析から、ゲノム医学、再生医学、移植・腫瘍免疫を基盤とした疾患・治療研究まで展開し、臨床への応用を目指している。

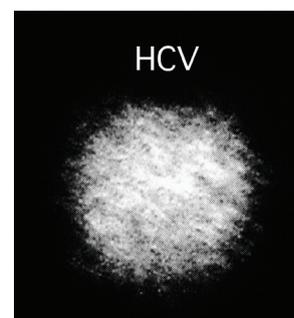
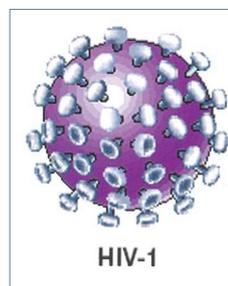
- 造血幹細胞の維持・分化機構の究明
- 造血器腫瘍におけるゲノム・遺伝子異常の解析
- 白血病発症機構の分子生物学的な解明
- 発生工学を用いた個体レベルでの白血病関連遺伝子の機能解析
- ヒト iPS 細胞を用いた造血細胞における再生医学、病態解明



生体防御感染症学 *Infectious Diseases*

HIV や C 型肝炎ウイルス、B 型肝炎ウイルス等の肝炎ウイルス感染症、日和見感染症、宿主の免疫反応を主な研究対象とし、病原微生物に対する生体防御機構の解析などを中心に研究を行っている。それらの成果を踏まえ、ウイルス感染症に対する新たな予防・治療・発症抑制法の開発も行っている。

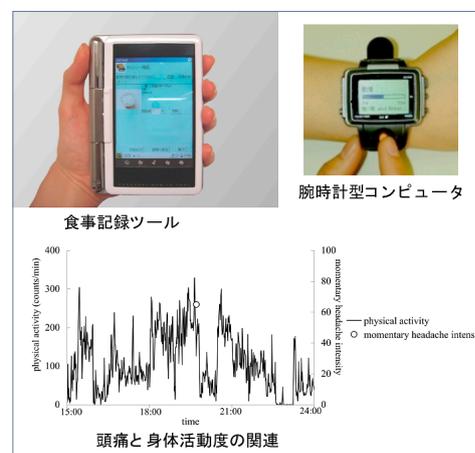
- ウイルス肝炎の治療・予防に関する研究
- HIV 感染症の臨床的研究
- C 型肝炎ウイルスによる肝がん機構とその抑制法の開発
- HIV 感染症の進展に関する研究
- C 型肝炎ウイルスによる肝外病変発生機構とその抑制法の開発
- B 型肝炎ウイルスによる肝がん機構とその抑制法の開発
- B 型肝炎ウイルスの遺伝子変異と病態との関連についての解析
- インフルエンザウイルス感染症の病態解明
- 細菌による血球細胞の活性化機序の解析
- 病原体感染時の自然免疫応答機構の解析
- 多剤耐性菌出現機構



ストレス防御・心身医学 *Stress Sciences and Psychosomatic Medicine*

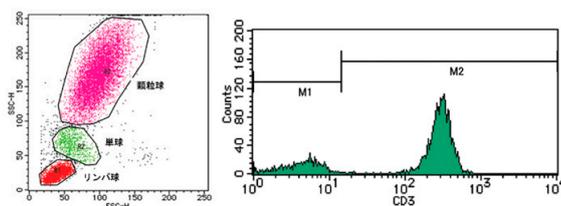
一次性頭痛や生活習慣病などの心身症、摂食障害、がん患者などを対象に、行動医学の新しい方法である Ecological Momentary Assessment (EMA)、摂食関連物質を中心とした生化学的手法、自律神経機能を中心とした生理学的手法、質問票を用いた心理学的手法を用いて、病態の解明、疾患の診断・病状の客観的指標の開発、治療法の開発などの研究を行っている。

- Ecological Momentary Assessment(EMA)：「現象を日常生活下で、その瞬間に評価・記録する方法」と定義されるもので、携帯型コンピュータを用いて、日常生活下において、自覚症状や行動などのモニタリングツール、身体活動度や自律神経機能などの客観的指標の評価記録ツールの開発および、それらを用いた各種疾患の病態解明、新たな治療法の開発を行っている。
- 摂食関連物質を中心とした生化学的手法：摂食障害を中心に、AGRP や FGF23 などの新規発見物質を検討することにより、病態の解明を行っている。
- 生理学的手法：自律神経機能を、非侵襲的な方法による心拍変動、血圧変動などの線形解析のみならず、フラクタル解析などの非線形解析を行うことにより、摂食障害を中心とした疾患の病態解明を行っている。
- 心理学的手法：東大式エゴグラムの開発を行っている。



病院検査部と一体となり、新しい検査法の開発・改良、各種病態の臨床検査を通した解析を行っている。

- リゾリン脂質性メディエーターの(病態)生理学的意義の解明とその測定 of 臨床検査医学的応用
- 血小板生物学、ヘパリン起因性血小板減少症の検査診断
- 肝疾患バイオマーカーの探索
- 遺伝子検査
- 酸化・還元アルブミンの測定の臨床応用
- フローサイトメトリーを用いた細胞表面抗原の解析並びに定量
- 超音波による心機能評価
- 呼吸機能と種々の病態との関連
- 脳磁図による視聴覚統合の神経機構の解析

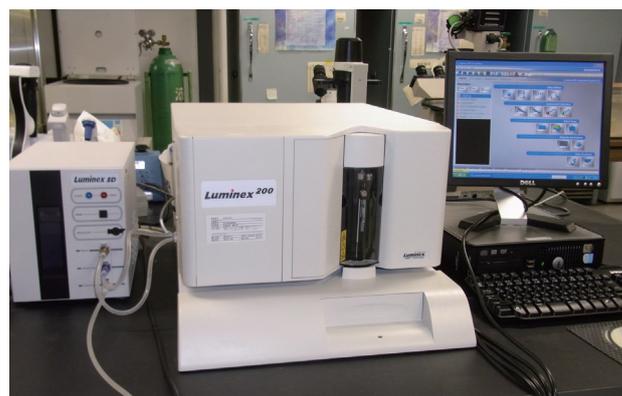


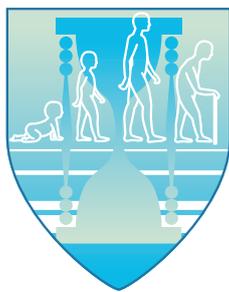
フローサイトメーターと細胞分析パターン

輸血医学 *Transfusion Medicine*

輸血医学教室では、臨床面においては輸血用血液製剤の一元管理・検査・供給を行うことにより、安全かつ適切な輸血療法の実施を目指している。以下のような研究を行っている。

- 血小板型 (HPA) および抗血小板抗体に関する研究
- 白血球型 (HLA) および抗 HLA 抗体に関する研究
- 顆粒球型および抗顆粒球抗体に関する研究
- 抗血管新生療法の開発に関する研究
- 輸血副作用の発症機序に関する研究
- 自己血採血の安全性に関する臨床研究



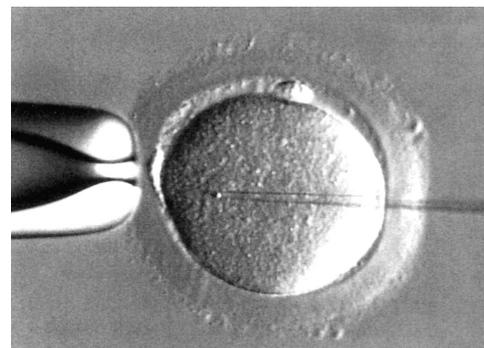


生殖・発達・加齢医学 Reproductive, Developmental and Aging Sciences

生殖内分泌学 *Reproductive Endocrinology*

<http://square.umin.ac.jp/kyobgyn/>

われわれは女性の生涯（思春期、生殖年齢、更年期、閉経後女性）にわたるリプロダクティブヘルスを包括的に管理するという観点から、基礎研究及び臨床研究に基づいて、高度な生殖医療を追求し、効率的かつ安全な治療法の開発を進めている。



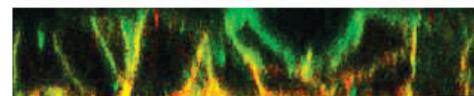
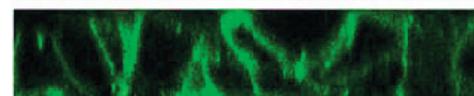
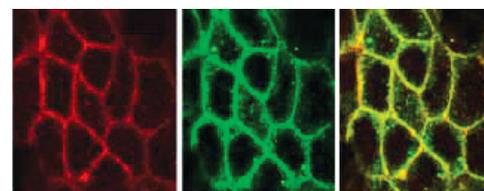
顕微授精（卵細胞質に精子を注入）

- 効率的で安全性の高い不妊治療の確立
- 生殖補助医療技術の開発
- 着床における子宮内膜と胚の相互作用に関する研究
- 子宮内膜症の病態に関する研究
- 卵胞発育の局所調節機構の解明
- 高度内視鏡手術 / 低侵襲手術の技術開発
- 更年期 / 閉経後女性に対するホルモン補充療法の開発
- 更年期 / 閉経後女性の健康諸問題に対する包括的支援
- 悪性腫瘍患者の生殖機能温存法の開発

生殖腫瘍学 *Gynecologic Oncology*

<http://square.umin.ac.jp/kyobgyn/>

子宮頸癌では、発癌機構に着目し、ヒトパピローマウィルスによる発癌機構の解明とワクチンへの応用について成果を挙げており、子宮体癌、卵巣癌では癌関連遺伝子の機能解析、治療標的分子・経路の同定をもとに臨床応用に向けて研究を進めている。臨床では、再発・難治性腫瘍に対する集学的な治療に加え、妊孕性温存治療を含めた低侵襲手術についても積極的に取り組んでいる。



腫瘍細胞における癌抑制遺伝子 scribble の発現

- 婦人科悪性腫瘍に対する拡大手術術式および腹腔鏡を用いた低侵襲手術の開発
- 子宮頸癌に対する妊孕性温存手術（広汎子宮頸部摘出術）
- 子宮頸部異形成に対する HPV 検査、治療ワクチンの開発（臨床試験中）
- 婦人科悪性腫瘍の網羅的ゲノム解析に基づく分子標的治療法と免疫療法の開発
- Drug Delivery System を用いた新規薬剤開発

超音波診断技術、疾患機序の探索により、より正確に胎児情報を把握する出生前診断技術、妊娠の生理・病理における免疫や炎症の関与の研究を行っている。その基礎研究成果に基づいて不育症や早産、妊娠高血圧症候群の新たな治療法の開発、早産予防法、早産児の脳性麻痺の予防法の開発を目指している。

- 出生前診断技術の開発
- 3次元超音波診断装置を用いた胎児診断法の確立
- 不育症の治療法の開発
- 合併症妊娠の管理法の確立
- 切迫流早産の予防・治療法の開発
- 脳性麻痺の予防法の開発

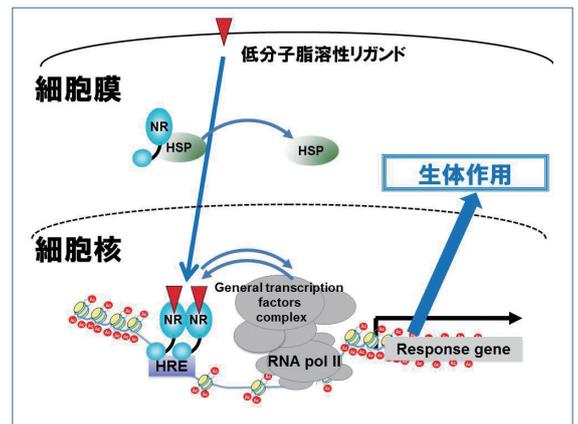


胎児の3次元超音波像

分子細胞生殖医学 *Molecular and Cellular Reproductive Medicine*

分子細胞生物学の知識・手法を駆使して、生殖医療における各種病態にアプローチしている。現在、エストロゲンを中心とした性ステロイドホルモンの生殖・発育に及ぼす影響、遺伝子発現制御メカニズムに関する研究が進行中である。

- 性ステロイドホルモンの生殖に及ぼす影響に関する研究
- 胚発生・発育における分子生物学的機序の解明
- 着床メカニズムの分子的解明
- 子宮内胎児発育に関する研究
- 分子遺伝学を応用した出生前診断法の確立



性ステロイドホルモンの作用機序

小児科学／発達発育学 *Pediatrics / Developmental Pediatrics*

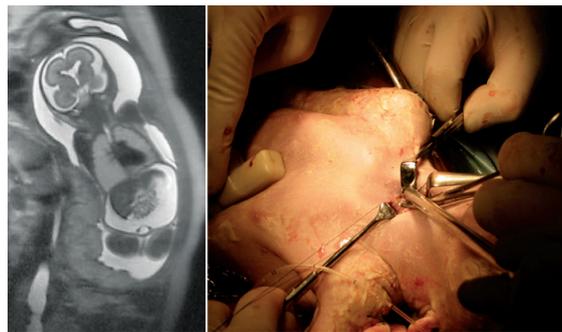
小児のからだところのすべての問題に対して診療、教育、研究をしています。特に分子生物学的アプローチによる小児新生児疾患の原因解明では世界的業績をあげています。

- 難治性腎疾患の分子診断、発症機序の解明と集学的治療
- 血液悪性腫瘍・固形腫瘍の分子診断と発症機序の解明
- 白血病と固形腫に関する多施設共同臨床研究
- 内分泌代謝疾患・糖尿病の病因解明、分子診断と集学的治療
- 先天性複雑心奇形の診断、発症機序の解明と集学的治療
- 新生児のピオチン・消化管ホルモンに関する研究
- 新生児各種疾患におけるバイオマーカーの多項目網羅的検討
- NIRSによる新生児・乳児の神経発達メカニズムの解明
- 極低出生体重児における網羅的DNAエピジェネティクス解析
- 母子感染症や環境汚染による神経発達障害の病態解析
- 難治性神経筋疾患の診断と包括的治療
- ミトコンドリア異常症の分子診断と治療
- 発達障害の早期発見と適正な療育アプローチ
- 免疫不全症候群とアレルギー疾患の発症機序の解明と集学的治療



小児外科疾患の診療を広くおこなっていますが、特に胎児治療、新生児治療は産科、新生児科と連携し力を入れています。また、低侵襲手術を積極的に導入し、小児の様々な外科疾患を腹腔鏡や胸腔鏡を用いて治療しています。

- 胎児手術・胎児治療法の開発
- 小児の腹腔鏡手術・胸腔鏡手術
- 小児のロボット手術の研究
- 胆道閉鎖症・胆道拡張症の治療と長期予後の研究
- 小児気管軟化症・狭窄症の再生医療による治療の研究
- 小児手術モデルの開発に関する研究
- 腸内細菌叢と小児外科疾患の関連性の解明
- 大規模データベースを用いた小児外科手術アウトカムの解析

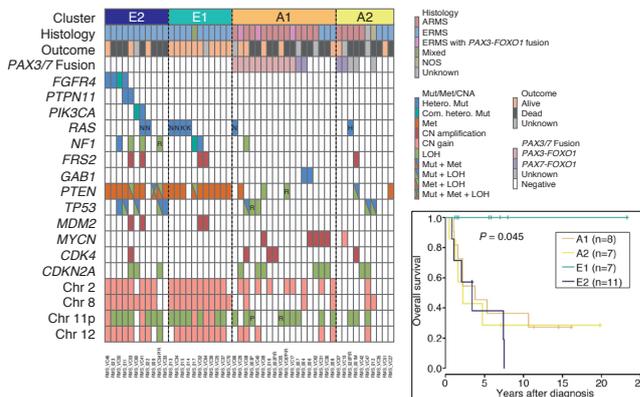


EXIT(Ex utero intrapartum treatment): 喉頭閉鎖症患児に臍帯血流下に気管切開をおこなう

小児腫瘍学 *Pediatric Oncology*

小児血液腫瘍、固形腫瘍の集学的治療と原因解明を目指した基礎研究をおこなっています。白血病にたいして、移植医療を含めた最先端の医療を提供しています。また固形腫瘍では、化学療法と手術治療の効果的な組み合わせで治療成績を上げることが目標に、小児科外科チームと密接な連携のもとに治療に当たり成果を上げています。基礎研究においては、小児悪性腫瘍の病態解明に関する研究に取り組んでいます。

- 神経芽腫の遺伝子解析と予後因子の解析
- 胚細胞腫瘍の発症に関する研究
- 横紋筋肉腫のゲノム／エピゲノム解析
- 肝芽腫における網羅的ゲノム解析
- 急性リンパ性白血病の病態解明と診断に関する研究
- 白血病、固形腫瘍における多施設協同臨床研究

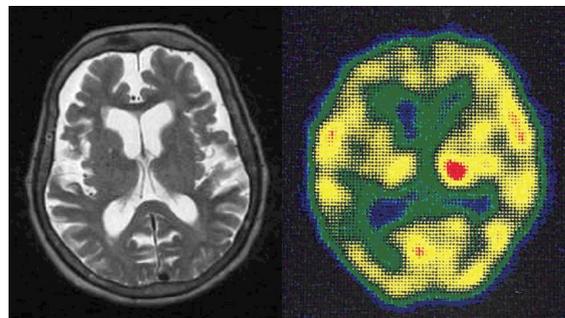


横紋筋肉腫におけるゲノム・エピゲノム異常の全体図とサブクラスごとの生存曲線

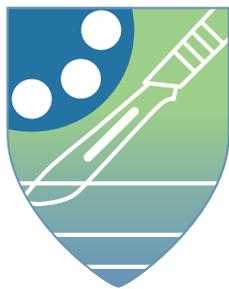
老年病学 *Geriatric Medicine*

老年医学では病気の治療のみならず、高齢者総合機能評価を用いて高齢患者を全人的に「病人を治す」ことを目標とし、疾患の治療のみならず社会生活に適応するよう生活の質の維持・向上に努めています。生活習慣病をはじめとした慢性疾患から、物忘れや転倒、やせ、筋力低下といった老年症候群の診療を行っています。本教室は1962年創立でわが国最初の老年医学教室です。研究テーマは以下の通りです。

- 血管石灰化の分子機序の解明
- サルコペニアの分子機序の解明
- 認知症患者のケアと介護ストレス
- 降圧薬による認知機能抑制効果の評価
- 薬物有害事象の危険因子の解明
- 性ホルモンと老年疾患との関連
- 骨粗鬆症をはじめとしたロコモティブ症候群の原因遺伝子の検索
- 睡眠時無呼吸症候群における血管障害の分子機序



アルツハイマー型認知症の頭部MRIと脳血流SPECT



外科学 Surgical Sciences

呼吸器外科学 *Thoracic Surgery*

<http://ctstokyo.umin.ne.jp/>

近年患者数が増加している原発性肺癌・転移性肺腫瘍・縦隔腫瘍などの胸部悪性新生物に対する外科治療学および腫瘍学を専門とする。肺癌術後再発症例等を対象とした癌免疫療法の臨床および基礎的研究を行う。2014年3月から肺移植実施施設に認定され脳死および生体肺移植の実施のための患者登録を行うとともに、移植肺障害・拒絶に関する基礎的研究を行う。

- 胸部悪性疾患に対する低侵襲治療学
- 原発性肺癌に関する臨床・基礎腫瘍学
- 胸腺腫瘍に関する臨床・基礎腫瘍学
- 肺悪性腫瘍に対する免疫治療の臨床的および基礎的研究
- 肺移植の臨床的および基礎的研究

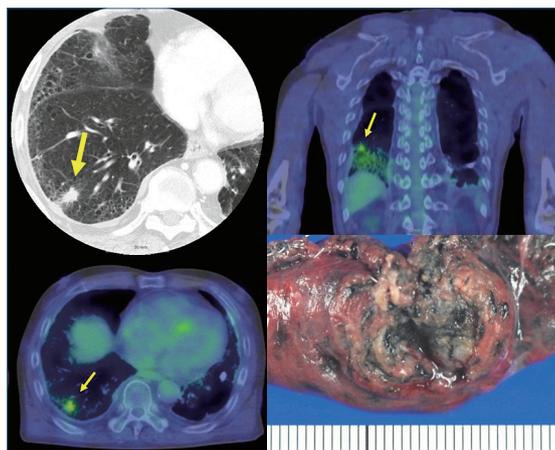


図 間質性肺炎 (IP) 合併右肺下葉肺癌症例 (腫瘍矢印で示す)。
左) High-resolution CT (右上) FDG-PET 前額断面
(左下) FDG-PET 横断面 (右下) 切除標本

心臓外科学 *Cardiovascular Surgery*

<http://ctstokyo.umin.ne.jp/>

先進医療を積極的に導入し、年間 400 例の手術を優れた成績で行い、日本をリードしている。特に、重症心不全に対する心臓移植・人工心臓治療と研究、大動脈手術における脳脊髄保護、複雑心奇形の集学的治療、自己弁温存弁膜症手術を積極的に推進している。

- 臨床研究
 - 心臓移植の長期成績向上
 - 人工心臓治療
 - 自己弁温存手術
 - 低侵襲手術
 - 複雑心奇形の治療
- 基礎研究
 - 人工心臓の適正補助条件の開発
 - 心臓再生医療
 - 新しい内視鏡下縫合デバイスの開発



日本で臨床使用されている
植込み型補人工心臓

消化管癌、特に食道癌、胃癌治療の治療成績向上を第一の目標としている。標準治療にもとづいた日常診療をもっとも重要視しているが、大学の外科学教室として「よりよい手術で治す」ことを目指し、臨床的、基礎的研究も精力的に行っている。「よりよい手術」とは、癌治療においては、根治性向上と臓器損失に伴う QOL の低下をいかに抑制するかにかかっている。過不足ない個別化手術が理想であり、また侵襲をおさえた手術も我々の目標である。食道癌手術では、da Vinci 支援下非開胸による根治術式を開発しており、術後合併症の抑制、QOL の維持に良好な結果をえている。

- よりよい手術を目指して
 - 食道癌に対するロボット支援下非開胸食道切除術 (写真)
 - 胃腫瘍に対する非穿孔式腹腔鏡内視鏡合同手術 (NEWS)
 - 腹腔鏡下胃切除、縦隔鏡腹腔鏡補助下非開胸食道切除
- 癌の根治性向上を目指して
 - HER2 陽性切除不能進行・再発胃癌に対する S-1/CDDP/Herceptin 療法
 - 食道癌に対する γ s δ T 細胞を用いた化学免疫療法
- 消化器癌の発生・進展・診断・治療に関する研究
 - 炎症と消化器癌発癌
 - 食道癌・胃癌の癌特異的蛍光プローブの開発と臨床応用
 - 食道癌に対するウイルス療法
 - 食道癌・胃癌のジェネティクス・エピジェネティクス
 - 新しいバイオマーカーを用いた癌の早期診断



肝胆膵外科学 *Hepatobiliary Pancreatic Surgery*

肝細胞癌、転移性肝癌、肝門部胆管癌など年間 200 症例に及ぶ肝切除を施行し、手術成績は世界でもトップランクである。肝胆膵悪性腫瘍の治療成績の向上を目指し、術式の開発、超音波による血行動態の解析、虚血再還流障害、肝再生など多方面の研究を行っている。

- 肝細胞癌における遺伝子異常の解析
- 肝予備能の評価に関する研究
- 肝静脈閉塞時の肝血行動態の解析と術式への応用
- 肝切除手術のナビゲーションの研究
- 肝切除中の術中診断法に関する研究 (造影超音波、ICG 蛍光法、肝硬度画像)
- 大腸癌肝転移の周術期化学療法の有用性の研究
- 肝細胞癌に対する肝切除と RFA の有効性を比較する RCT (SURF trial)
- 膵癌の周術期化学療法の有用性の研究
- 同種凍結静脈を血行再建に用いた肝胆膵悪性腫瘍手術
- 肝癒着モデルの開発と癒着防止材の検討

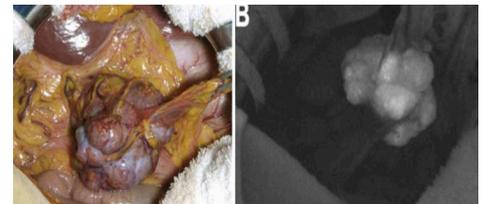


図 1. ICG 蛍光法を用いた術中腫瘍の同定



図 2. 同種凍結静脈を結構再建に用いた肝胆膵悪性腫瘍手術

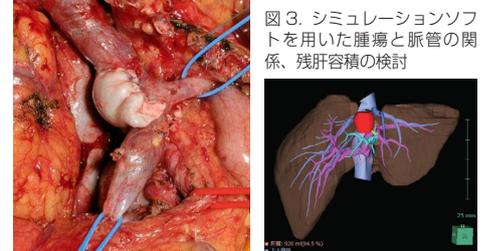


図 3. シミュレーションソフトを用いた腫瘍と尿管の関係、残肝容積の検討

泌尿器外科学 *Urology*

入院棟 8 階北病棟にベッド数 44 床を擁し、2016 年の 1 年間に 1,538 件の手術が行われた。腎・尿管・副腎疾患に対する腹腔鏡手術・小切開手術が増加しており、また前立腺癌の他、腎癌、膀胱癌に対するロボット手術を行っている。難治疾患の間質性膀胱炎に対する水圧拡張術やボツリヌス毒素注入療法も行われている。2016 年の外来のべ総数は 22,306 人であり、腎腫瘍外来、膀胱腫瘍外来、前立腺外来、副腎外科外来、間質性膀胱炎外来、女性泌尿器外来など多数の専門外来を行っている。

- 副腎性クッシング症候群のゲノム研究 (図 1)
- 前立腺癌ウイルス療法
- 腎癌・腎盂尿管癌・精巣癌のゲノム研究
- 膀胱癌に対する NY 抗原ワクチン治療
- 転移性腎癌・膀胱癌に対する樹状細胞療法
- 難治性間質性膀胱炎へのボツリヌス毒素注入療法
- 人工尿道括約筋治療
- ロボット支援前立腺全摘術
- ロボット支援腎部分切除術
- 浸潤性膀胱癌に対するロボット支援膀胱全摘除術 (自主臨床試験)

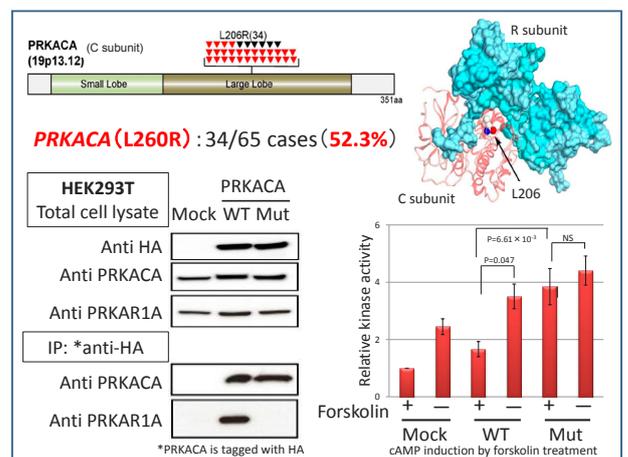


図 1 副腎性クッシング症候群の 50% 以上で認める PRKACA p.L206R 遺伝子変異はプロテインキナーゼ A 活性を恒常的に亢進させる。

2016年12月まで生体肝移植は570例、脳死肝移植は25例の経験がある。成人生体肝移植症例の5年生存率は85%であり、全国平均の73%に比べ有意に良好な成績である。

- 生体肝移植手術手技：通常の左肝グラフト、右肝グラフトに加え後区域グラフトの選択、APOLT(Auxiliary partial orthotopic liver transplantation)の選択
- 同種凍結静脈を用いた肝静脈再建
- ICG 蛍光法を用いたグラフト肝鬱血域の評価
- 生体肝移植後 C 型肝炎の治療
- エラストグラフィによるグラフト拒絶反応の予測
- 生体肝移植後の新規発症糖尿病と予後の関係
- 急性拒絶反応の診断と治療
- 術後感染症の診断と治療

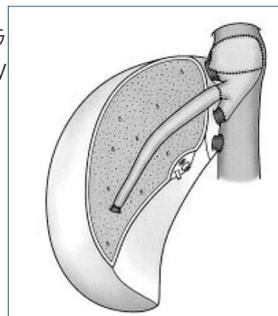


図2. 同種凍結静脈を用いた肝静脈再建

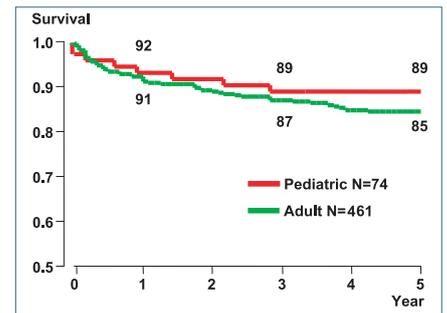


図1. 生体肝移植後の生存率

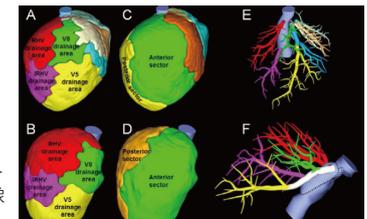


図3. 肝シミュレーションソフトによるグラフトの3D画像

腫瘍外科学 *Surgical Oncology*

主に結腸癌、直腸癌、炎症性腸疾患を対象に、基礎研究および臨床研究を進めている。基礎研究としては癌の発生、転移、免疫などの生命現象を多方面から研究し、臨床研究としては腹腔鏡手術・ロボット手術 (da Vinci) による低侵襲手術や直腸癌に対する術前化学放射線療法など、個々の患者さんにとって、最も負担の少なくかつ最善の治療法を探索している。

- ロボット支援腹腔鏡補助下大腸切除術 (da Vinci 手術)
- 癌の放射線、抗癌剤感受性の検討
- 腫瘍血管の特異性の検討と治療への応用
- 潰瘍性大腸炎に対する大腸癌サーベイランス
- 潰瘍性大腸炎の発癌機構
- がんオートファジー
- 放射線化学免疫療法の開発
- 低分化大腸癌の遺伝子解析
- 腹膜播腫に対する腹腔内化学療法

図1 直腸癌における DNA マイクロアレイによる化学放射線療法感受性予測

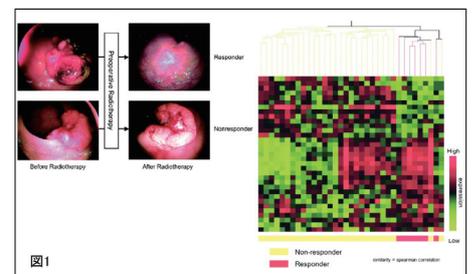


図1

図2 潰瘍性大腸炎サーベイランスにおけるランダム生検 vs ターゲット生検の前向き比較試験

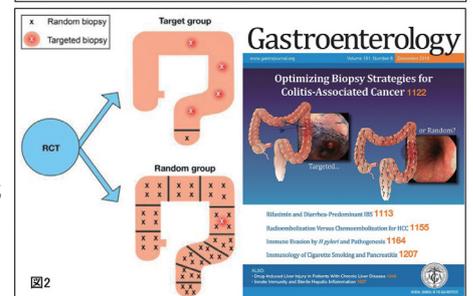
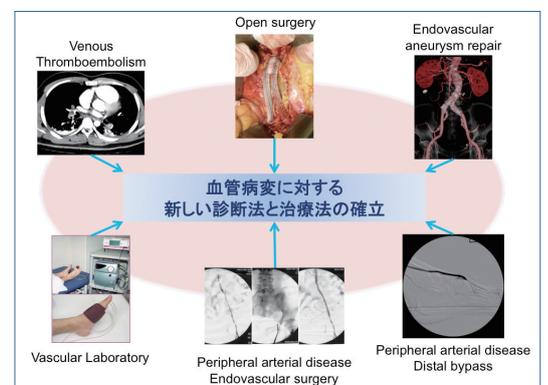


図2

血管外科学 *Vascular Surgery*

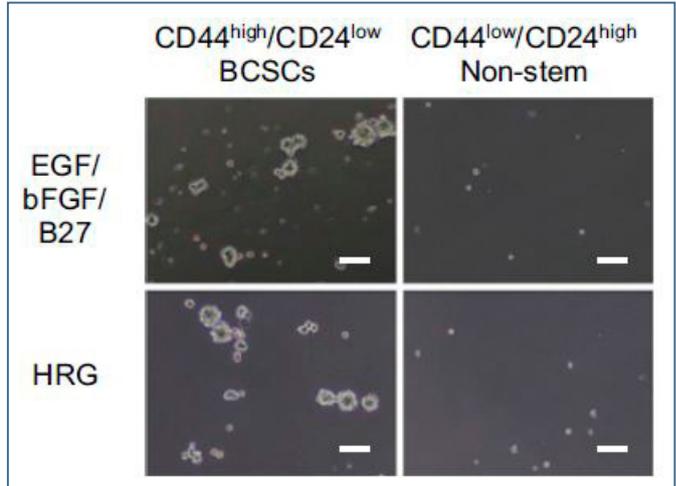
様々な血管疾患を有する患者の治療を行い、動脈硬化、血管新生、血管再生などの生命現象を多方面から研究し、その成果をもとにして個々の患者さんにとって、もっとも負担の少なくかつ最善の治療法を見出す努力をしています。

- 血管病変に対する新しい診断法と治療法の確立
 - 閉塞性動脈硬化症に対する血管再生療法
 - 大動脈瘤モデルの作成とシミュレーション
 - 末梢動脈疾患の遺伝子解析
 - 動脈硬化性疾患に対する蛍光プローベを用いた可視化
 - 低侵襲血管外科手術をめざしたナビゲーションシステムの確立
 - 間歇性跛行の力学的解明
 - 大動脈瘤の進展メカニズムの解明
 - 小口径人工血管の開発
 - スtentグラフト内挿術後血行力学的変化の解明
 - 血管疾患を対象とした drug delivery system の確立



乳腺・内分泌外科では年間 250 例の乳癌・甲状腺癌・良性甲状腺腫瘍・副甲状腺腫瘍の手術を行っている。研究の対象は主に、乳癌と甲状腺癌である。

- 乳癌幹細胞のゲノム解析
- 癌治療患者へのカバーメークと QOL に関する研究
- 集束超音波治療実用化のためのモニタリング手法の開発
- 転移性乳癌に対する新規抗癌剤エリブリンの臨床効果

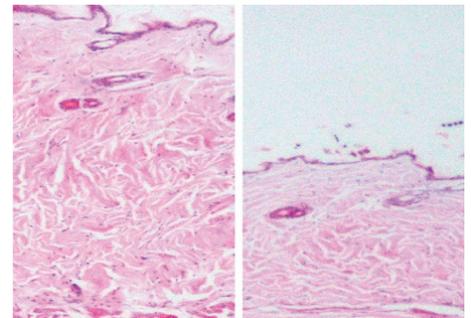


スフィア形成する乳癌幹細胞 (PNAS vol.109 pp6584-9 2012)

皮膚科学 *Dermatology*

当教室では、以下のような短期的あるいは長期的であっても臨床に還元できるような、最先端の研究を行っている。

- 強皮症における免疫異常や皮膚硬化の分子機序
- 強皮症における B 細胞除去療法などの新規治療法の開発
- 細胞接着分子欠損マウス、ケモカイン欠損マウスを用いた細胞接着分子やケモカインによる炎症機序
- 膠原病における自己抗体の新規同定やその臨床的意義
- B 細胞の炎症性疾患における新しい役割
- アトピー性皮膚炎の免疫学的異常の解明
- Fli1 による強皮症病態一元化モデルの作成
- 皮膚悪性リンパ腫におけるケモカインの役割の解明

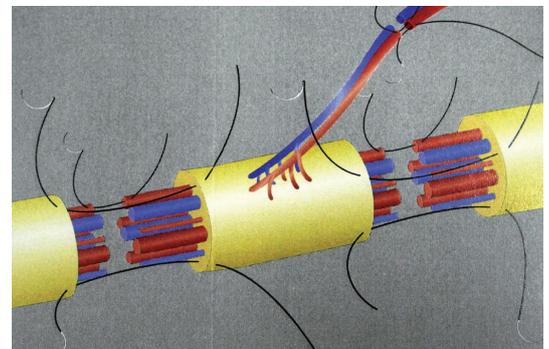


プレオマイシンによって誘導される皮膚変化(左)は、CD19 欠損マウスで改善する(右)

形成外科学 *Plastic and Reconstructive Surgery*

先天奇形の成立に関わる発生生物学的研究を行うとともに、再生医学や超微小外科の技術を用いて、皮膚、軟部組織、軟骨、脂肪、筋肉、神経、骨、手指、顔面、乳房、陰茎などの形態と機能の再建の臨床応用に向けた研究を幅広く展開しています。毛髪再生や皮膚老化など美容医学的研究にも力を入れています。

- 基礎研究
 - 吸引脂肪から採取した間葉系幹細胞の臨床応用に関する研究
 - 成人幹細胞を用いた器官形成に関する研究
 - 培養細胞による毛髪再生の臨床応用に関する研究
 - 皮膚の老化関連因子の探索
 - 老化治療におけるホルモン、レチノイドの作用機構の解析
 - 真皮線維芽細胞、構造蛋白の表皮制御機構の解析
- 臨床研究
 - 超微小血管吻合を用いた各種組織移植
 - 神経麻痺と再建術の開発
 - マイクロサージャリーの美容外科への応用
 - リンパ浮腫発生の機序と外科的治療法の開発
 - 血管をつけた卵巣の保存と再移植に関する研究
 - 血行を有する神経細胞、筋細胞、脂肪細胞、リンパ節などの遊離移植
 - 同種子宮・卵巣・肛門移植
 - 超微小血管吻合トレーニング法の開発



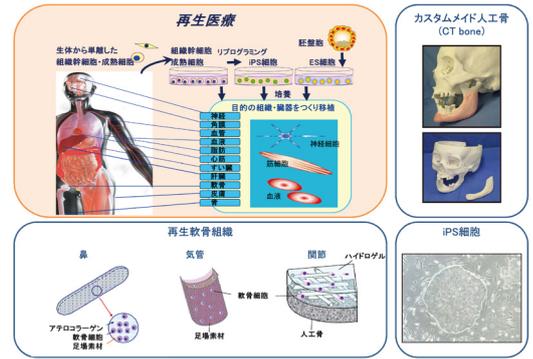
超微小血管吻合を用いた血管柄付き神経移植術。神経の栄養血管(0.5mm 径)を吻合することでシュワン細胞を 100% 生着させる。

口腔顎顔面外科学 *Oral and Maxillofacial Surgery*

<http://plaza.umin.ac.jp/oralsurg/>

口腔・顎顔面疾患の病態解明および治療法の確立を目的に、多角的方面から臨床的・基礎的研究を行っている。ティッシュ・エンジニアリング部および医工連携部にも参画しており、骨・軟骨の再生医療の確立を目指している。

- 臨床研究
 - 口唇口蓋裂に伴う顔面変形および不正咬合に対する治療
 - 頭蓋顎顔面先天異常における顔面成長の研究
 - カスタムメイド人工骨 (CT Bone) 移植による顎顔面再建
 - 口唇口蓋裂に伴う重度鼻変形修正に対するインプラント型再生軟骨移植
 - 進行性骨化性線維異形成症 (FOP) 患者の咬合管理
 - 周術期がん患者に対する口腔ケア体制確立のための QOL 研究
 - 口腔カンジダ症に対する抗真菌薬の感受性に関する臨床研究
- 基礎研究
 - 組織工学的手法を用いた骨・軟骨再生
 - 骨再生誘導因子を付与したインテリジェント型人工骨の開発
 - 微小テトラポッド型人工骨の開発
 - 軟骨の組織修復に関する分子生物学と再生医療への応用
 - iPS 細胞を用いた軟骨再生医療
 - 軟骨・骨再生における新規足場素材の開発
 - 生体内における軟骨・骨再生組織の評価
 - 間葉系細胞分化制御機構に関する研究
 - 口腔がんおよび前がん病変におけるエピジェネティックな異常の解明
 - 口腔がん多段階発がん過程におけるスフィンゴシン-1-リン酸シグナル調節機構の解明
 - 歯髄由来幹細胞における microRNA の機能解析

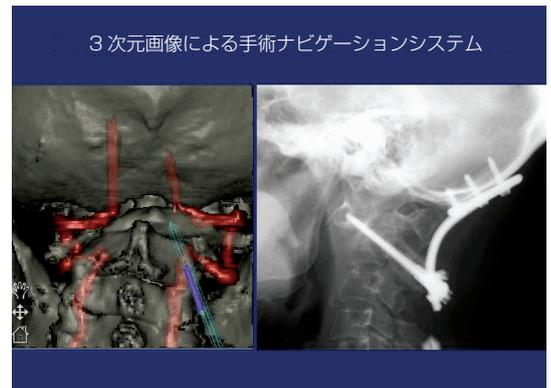


整形外科学 *Orthopaedic Surgery*

<http://www.u-tokyo-ortho.jp/>

運動器に関連する様々な臨床研究及び基礎研究を行っている。臨床の場で長年培われた経験・技術と、分子生物学的手法を駆使して得られた知見を融合させ、新たな診断法や治療法を生み出すことを目標としている。

- 変形性関節症の病態解明・治療法の確立を旨とした統合的研究
- 骨・軟骨・神経組織の再生医療の実現に向けた基礎的研究
- 各種サイトカインの骨代謝機能の解明
- 加齢による骨量減少の分子メカニズムの解明
- 破骨細胞の分化、アポトーシスの分子メカニズムの解明 (RANKL-RANK、INF、Src)
- 遺伝子治療による病的骨破壊の制御
- 三次元画像表示による手術ナビゲーションシステムの開発
- MPC ポリマーを用いた長寿命型人工関節の開発

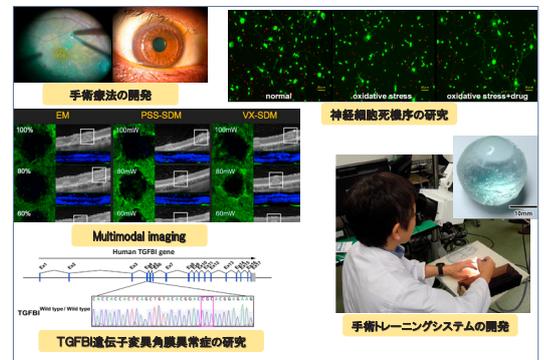


眼科学 *Ophthalmology*

<http://plaza.umin.ac.jp/oph/>

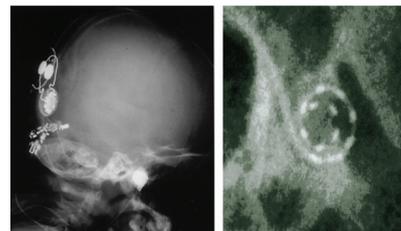
眼に関するあらゆる疾患に対して最先端の技術・知識による診断・治療を行うことを目標としている。失明原因上位の疾患から難治性眼疾患に至るまで発症機構解明、診断法、治療法の開発をめざし、分子生物学、免疫学、薬理学等を含め、医工薬連携等を通じた基礎研究と、臨床疫学、生物統計学による臨床研究に力を入れている。

- 特に緑内障、網膜、角膜、ぶどう膜疾患の新しい薬物治療法ならびに手術療法の開発とその評価
- 緑内障の機能および構造データ解析による診断治療法の開発
- 緑内障臨床検体や遺伝子改変動物を用いた眼圧維持機構の解明と薬剤開発
- 網膜神経及びグリア細胞の細胞死機序と神経保護薬の探索的研究
- バイオニックアイによる手術トレーニングシステムの開発と応用
- 角膜再生医療の向上と遺伝性角膜疾患に対する新規治療法の開発
- 角膜透明性維持の機序の解明
- 難治性ぶどう膜炎や悪性リンパ腫の新規治療法の探索
- 黄斑疾患症例における構造および機能に関する multimodal imaging の包括的研究



臨床と基礎研究に分けて紹介する。臨床研究は病院の特殊外来で行われ、耳疾患、新生児から老人までの難聴、頭頸部癌、副鼻腔炎、めまい、音声・嚥下障害などである。基礎研究は免疫組織化学、分子生物学、電気生理学に重点を置き、教室および基礎医学の研究室で行っている。

- 臨床研究
 - 小児の人工内耳と聴覚・音声・言語の発達
 - 先天性小耳症・外耳道閉鎖の手術による整容と聴力改善（形成外科と合同手術）
 - 頭頸部癌疾患の術後の音声・嚥下機能回復を目指した手術と Q.O.L
 - めまい・平衡障害と前庭頸筋電位・電気刺激による平衡リハビリ
 - 副鼻腔および頭蓋底手術へのナビゲーション
 - 嚥下障害と音声障害の手術的改善とリハビリテーション
- 基礎研究
 - 内耳の分子生物学
 - 咽頭癌の分子生物学
 - 内耳有毛細胞と嗅覚上皮の分化と発生
 - 前庭頸筋電位の起源
 - 嗅上皮の老化と再生
 - 声帯振動の生理

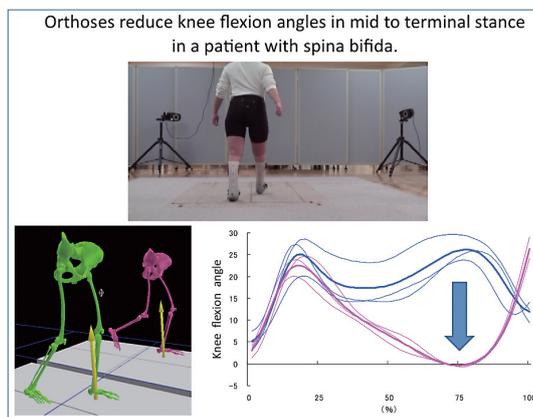


人工内耳

リハビリテーション医学 *Rehabilitation Medicine*

生活活動の制限や社会参加の制約の原因となる障害の機序を明らかにし、患者の最大限の可能性を引き出す方法の開発を目的として、診療に密着した基礎科学的研究から社会医学的研究まで多面的な研究を行っている。

- 歩行解析装置による異常歩行の研究
 - 赤外線カメラを用いた 3 次元動作解析法 (VICON)
 - 床反力計を用いた 3 次元床反力解析
 - 圧センサーを用いた足底圧分布の変動の解析
- 希少難治性疾患に関する臨床研究
 - 進行性骨化性線維異形成症の研究
 - 先天性無痛症の研究
- 先天性四肢形成不全に関する臨床研究
- ロボットリハビリテーションの介入効果に関する研究

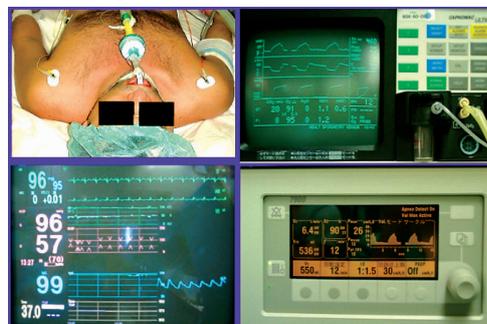


歩行解析

麻酔学 *Anesthesiology*

当教室には、大きく 7 つの研究グループがあり、臨床に役立つ研究をモットーに研究を行っています。

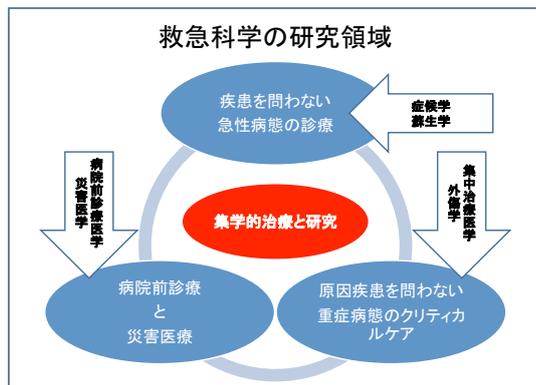
- 呼吸 急性肺障害におけるサイトカインシグナルの役割
呼吸不全患者における至適換気モードの検討
- 免疫 麻酔薬による免疫機能の修飾
敗血症及び虚血-再灌流傷害における細胞障害機構
- ショック ショックの病態の解明
代用血漿剤のショックにおける役割の解明
- 炎症 マウス下肢虚血再灌流後臓器障害の脂質受容体による制御機構
- 疼痛 痛覚過敏病態形成における脂質シグナル分子の解明
炎症によって惹起される神経因性疼痛の成立における脊髄グリア細胞の役割
末梢性及び中枢性痒痒メカニズムの検討
認知行動療法による慢性疼痛の治療およびメカニズムの解明
- 神経 麻酔中の脳波解析
心臓手術と中枢神経障害の検討
麻酔薬の脳保護効果の検討
- 麻酔器および医療用機器
新しい挿管器具の開発と評価
- 糖代謝 麻酔薬の生体内糖代謝機構に与える影響
- 医療統計 大規模データベースを利用した臨床麻酔の疫学調査、予後調査

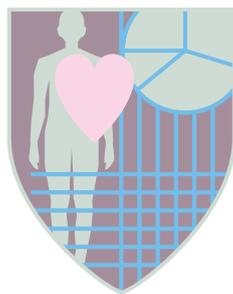


麻酔とモニター

救急科は、突発不測の急な傷病に対応する診療科であり、専門領域は病院前・災害医療から救急外来、集中治療まで広範囲に及ぶ。これらの医療を支える医学が救急科学である。本学救急科学の主題は、下記である。

- 病態・疾病ごとの緊急度（Acuity）に係る研究
 - 判定された緊急度の確からしさ（確定緊急度）の確立
 - 多職種連携強化のための傷病者緊急度・重症度スコアリングシステムの開発
- 救急外来における同時複数傷病者に対する診療手法の研究
- 医療チーム現場参画の有用性の研究
- メディカルコントロールに係る研究
- 地域救急医療体制の質評価指標の研究
- 集中治療領域の研究
 - バイオマーカーと重症度に係る研究
 - 非侵襲的モニタリングによるショックの予測
- 汎用性が高く耐久性のある救急災害医療情報共有システムの開発
- 多数傷病者発生事故・自然災害時の医療に係る研究
 - 地域ごとの災害時医療の需給均衡の研究
 - 地域ごとの経時的に必要な災害時医療のリソースについての研究





健康科学・看護学 Health Sciences and Nursing

精神保健学／精神看護学 *Mental Health / Psychiatric Nursing*

<http://plaza.umin.ac.jp/~heart/>

心の健康問題とストレスの研究および専門家の教育を国際的視野から推進

- 精神保健
 - 精神保健疫学
 - 職場のメンタルヘルス・産業保健心理学
 - 心理教育・ストレスマネジメント
 - 災害精神保健
 - 国際精神保健
- 精神看護
 - 精神疾患を有する人の地域生活支援
 - 精神保健領域における健康自己管理
 - 精神疾患を有する人にとってのリハビリ
 - ピアサポート



生物統計学／疫学・予防保健学 *Biostatistics / Epidemiology and Preventive Health Sciences*

<http://www.epistat.m.u-tokyo.ac.jp/>

本研究室は、生物統計学・理論疫学の方法論研究と、臨床・疫学研究遂行におけるコンサルテーション・研究支援を行っています。医学部・医学系研究科での医学統計教育、東大病院臨床研究支援センターが行う臨床研究の研究計画・統計解析支援、および全国の臨床研究機関のデータセンターを担う将来の生物統計家の育成支援もわれわれの重要なミッションです。

- 方法論的研究
 - 疫学・臨床試験のデザイン・解析方法
 - 因果推論、欠測データ解析、測定誤差モデル
 - メタ・アナリシス（代替エンドポイント評価）
- 共同研究プロジェクト例
 - 動脈硬化予防研究基金統合研究（JALS）
 - 慢性腎臓病患者コホート研究（CKD-JAC）
 - がん臨床研究支援事業（研究者主導臨床試験 N-SAS）



当研究室では、患者、医療従事者、関連施設、社会といった関係者すべてに「well-being」をもたらすための新しい実践モデルやシステムの提案を目指している。そのために、組織プロセス、看護をとりまく職場環境や道具、政策等とアウトカムや効率性との関連を追及したり、看護職や組織の潜在的な力を引き出すアプローチについて研究している。



- ミッションマネジメント
- ダイバーシティマネジメント
- リーダーシップ
- 組織の活性化
- 価値共有
- 職場コミュニケーション
- キャリア発達支援
- プロフェッショナリズム
- フットケアに関する新しい診断・ケア技術の開発

家族看護学 *Family Nursing*

<http://www.fn.m.u-tokyo.ac.jp>

少子高齢化や都市化に伴う地域ネットワークの脆弱化、男女共同参画などの社会の動きに伴って、家族の形態や機能にも変化が生じている。現在の日本社会は、患者中心ばかりでなく、看護の対象として家族を基本に据える看護研究に期待している。当教室では、中でも、母子領域と小児領域の家族看護学研究に焦点をあてている。



- 産後うつと育児困難に関する研究・児童虐待予防
- 慢性疾患をもつ子どもと養育者のための QOL 尺度開発
- 慢性疾患をもつ子どもと家族の移行期支援
- 小児がん経験者の晩期合併症のケアと教育・復学・就労支援
- 保育所看護職の役割とその専門性
- 医療的ケアを要する子どものいる家族の介護負担と社会サービスの利用行動
- 死にゆく患者とその家族への援助 (QOL、家族機能に関する研究)

地域看護学 *Community Health Nursing*

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/chn/>

全てのライフステージ・健康レベルの人々を対象とする。地域（コミュニティ）や集団の特性を活かした働きかけを行い、システムを構築することにより、人々の健康と QOL を持続的に維持・向上することを旨とする。また、地域ケアの担い手である保健師の支援技術に関する研究も展開している。

- 地域ケアシステムの整備
- 母子保健活動
- 精神保健活動
- 高齢者保健活動
- 災害時保健活動
- 保健師の支援技術



地域看護学教室 研究の特徴

高齢者在宅長期ケア看護学／緩和ケア看護学 Gerontological Home Care and Long-term Care Nursing / Palliative Care Nursing

<http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp>

本研究室では、長期ケア患者・高齢者及び家族への看護活動の質保証・向上をめざした研究活動を行っている。①「病む・老いる」「他者をケアする」経験の説明枠組の解明をとおして、「日本の現場発看護学」の構築を目指し、②看護・医療の質向上活動の開発とその評価を行う。病棟、長期療養施設、外来及び在宅における家族支援、がん治療前後の生活支援等を対象としている。

- 長期ケアシステムにおける看護ケアの質保証
- 事例研究や現象学を通じた現場発看護学の構築
- 地域包括ケアシステム構築と看護の役割
- がん患者（造血幹細胞移植患者など）の外来看護支援評価
- 高齢者訪問看護質指標の開発
- ITを活用した看護支援／教育プログラムの開発



East Asian Forum of Nursing Scholars でシンポジウムを主催

母性看護学・助産学 Midwifery and Women's Health

<http://midwifery.m.u-tokyo.ac.jp/>

妊娠・分娩・産褥期の心身の変化は、その後の育児期、更年期、老年期といった女性の生涯にわたる健康に重大な影響を及ぼし、さらには子どもや家族・社会全体にも影響する。当教室は、特に周産期における母子の健康に焦点を当て、下記のテーマを中心に研究を行っている。

- 妊娠期・産後の生活習慣
 - 妊娠中の運動（マタニティヨガ）や日常活動の心身への効果
 - 妊娠・産褥期における母体の栄養改善を目的とした介入方法の検討
 - 産前・産後の働く女性への健康支援に関する研究
 - モンゴルにおける妊婦の受動喫煙の実態と影響
- 妊娠期・産後のメンタルヘルス
 - 出産前後の分娩恐怖感の心身への影響
 - 出産後の PTSD に影響を与える要因の検討
- 周産期分野における健康課題の明確化
 - パートナーからの暴力被害妊婦の実態
 - 産後の骨盤底筋機能障害の頻度とリスク因子
 - 新生児の皮膚バリア機能へのスキンケアの効果
 - エルサルバドルにおける妊産婦死亡の実態と科学的根拠に基づいた人間的出産



画 / 坂元正一

老年看護学／創傷看護学 Gerontological Nursing / Wound Care Management

<http://www.rounenkango.m.u-tokyo.ac.jp/>

高齢者に生じる創傷として重要な褥瘡や糖尿病性足潰瘍は、歩行、睡眠、食事、排泄などの基本的な日常生活行動自体によって生じるため、生活の支援が創傷管理の中で重要な要素となっている。特に、糖尿病、栄養、スキンケアは創傷治療に直接影響を与えるターゲットとして重要であり、当教室では、それらを視野に入れた創傷管理技術・機器の開発と評価を目的に、基礎研究（バイオロジー）を基に、工学者との連携による機器開発（エンジニアリング）、さらに臨床評価によってエビデンスを構築し、研究成果を社会へと還元するという、新しい看護学研究のあり方（看護理工学）を提唱している。

- 創傷管理技術・機器の開発と評価
 - 創傷の病態解明およびその診断技術の開発
 - 創傷の管理や予防を目的とした技術・機器の開発
 - 新規技術・機器の臨床評価
 - 高齢者の皮膚変化の生体工学的解明
 - 皮膚状態の客観的パラメータの探索
 - 皮膚機能の維持・増進を目的とした介入方法の検討



看護理工学の円環とそれに基づき開発したプロダクト

健康科学・看護学専攻の下記分野は指定の箇所をご参照ください。

健康社会学	保健社会行動学 (p50)
健康学習・教育学.....	保健社会行動学 (p50)
医療倫理学	医療倫理学 (p51)



国際保健学 International Health

国際保健政策学 *Global Health Policy*

<http://www.ghp.m.u-tokyo.ac.jp>

教室のミッションは、国内外を問わず科学的根拠に基づいた政策を推進し、人口レベルでの人々の健康を増進することである。教室のメンバーは、常に新しい知識やアイデアを生み出し、専門性及び指導力を発揮し、社会的・学問的にインパクトの高い研究を行っている。さらに、グローバルヘルスの実践ためのスキルを磨き、共同研究を通じ発展途上国のキャパシティービルディングにも貢献する。そして、最も大切なことは、グローバルヘルスの次世代のリーダーを育成することである。すべての講義は英語で行われ、討論やプレゼンテーション能力の向上をも伴わせている。

主な研究課題

- 世界の疾病負担研究 (GBD)
- 保健制度評価分析
- 国内医療政策改革
- 健康における不平等と不公平
- 感染症のモデリング
- 非感染性疾患
- 医療技術評価・医療イノベーション
- 福島県における放射線被ばくと健康



国際地域保健学 *Community and Global Health*

<http://www.ich.m.u-tokyo.ac.jp/>

社会的に弱い立場に置かれている人たちの健康と福祉のための活動を行っている。健康そのものは必ずしも最終的ゴールではない。今到達しえた健康をもとに、個人がいかに個々のゴールを夢見かつそこに達成し得るか？そこが肝心である。国際的視野をもって、そのための教育を実践する。そのための研究を実践する。またそのための事業がなされた時に、いったい誰が真の利益を受けているのか？そこを問い続ける。

- 健康、栄養と開発
- 健康、人権と人間の安全保障
- 生態学と感染症
- ヘルスプロモーション
- 災害と健康
- 世界の保健人材
- 母子保健
- 実践研究



ゲノム研究の方法論を導入した人類遺伝学的アプローチに基づき、アジア集団を中心とした人類集団の遺伝学的多様性を明らかにするとともに、運動器変性疾患、感染症、免疫系疾患、睡眠障害をはじめとする各種多因子疾患の遺伝素因・病態の解明を進めている。

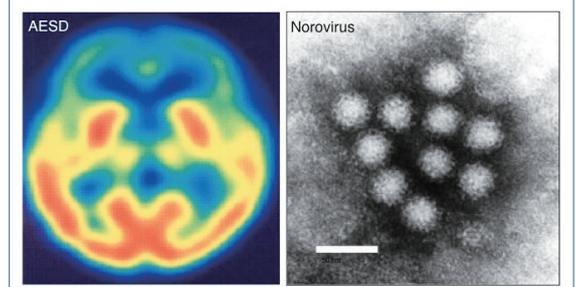


- 多因子疾患の遺伝的背景解明のための理論的・実験的検討
 - 疾患感受性遺伝子検出のための遺伝統計学的方法論の開発
 - 運動器変性疾患のゲノム疫学
 - 感染症の宿主側要因の解明
 - 免疫系疾患の遺伝素因の解明
 - 睡眠障害の遺伝素因の解明
- アジア系集団のゲノム多様性とその成因の解明
- タンパク質相互作用解析法の開発
- ヒトゲノムバリエーションデータベースの構築と GWAS データを利用した HLA 遺伝子領域のインピュテーション

発達医科学 *Developmental Medical Sciences*

母子保健学教室として 1966 年に設立され、母子の健康の維持増進（特に感染症・栄養障害・先天異常）にかかわる研究・教育活動を行ってきた。現在は主として発達障害（知的障害・運動障害）やてんかんをきたす小児期脳障害（先天性および後天性）の病因（遺伝および環境）・病態・予防・治療に関する研究を、国際保健学・発達神経科学の立場から、実験的・調査的手法を用いて進めている。

こどもの病気の克服をめざして：脳障害とウイルス感染症



- 発達期脳障害に関する研究
 - 神経細胞の分化・サイズ調節の異常（結節性硬化症）
 - 神経細胞移動障害（滑脳症、多小脳回）
 - 周生期脳障害（脳室周囲白質軟化）
 - 出生後脳障害（急性脳症）
 - 先天代謝異常症（ペルオキシソーム病、ミトコンドリア病）
- 感染症の分子疫学的研究（下痢症ウイルス）
- 母子の健康に関する疫学調査（栄養障害、肥満など）

人類生態学 *Human Ecology*

現代の様々な人間集団を栄養・人口・環境を切り口として解析し、人間集団の健康・生存を生態学的に理解することを目的とする。アジア・オセアニア諸集団を対象とするフィールドワークと同時に、栄養・環境化学物質の影響を扱う実験的研究を行い、両者の成果をもとに、国際保健が直面する諸問題の解決に貢献することを目指している。

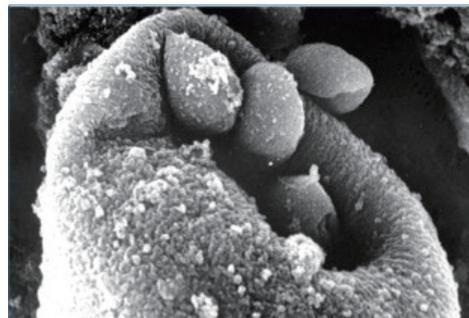


西ジャワ調査地の小学生

- アジア・オセアニア諸国における生業の変化が健康・環境に与える影響のメカニカルな解析
- GPS・GIS・リモートセンシングの健康生態学・国際保健学への応用
- インドネシアにおける河川の複合化学汚染が小児の健康に及ぼす影響
- アジア・オセアニア諸集団における栄養生態学、生業生態学、生物人口学、医療人類学の研究
- 周産期における重金属あるいは内分泌攪乱化学物質の発達毒性
- 栄養素・栄養状態による環境中化学物質の毒性修飾とその機構解明
- 持続可能社会と健康

寄生性原虫、特に熱帯熱マラリア原虫、赤痢アメーバ原虫、リーシュマニア原虫を材料に、生化学、分子細胞生物学、逆遺伝学、ライブイメージング、オミックス解析等の手法を用いて、原虫の感染性に関わる機構や代謝系の研究を行っている。特に、小胞輸送、ファゴサイトーシス、オートファジー、プロテアーゼ活性化・輸送、アミノ酸代謝、RNA 成熟化、タンパク質合成、創薬、オルガネラ特殊進化などに注目している。実験手法は、分子生物学、生化学、細胞生物学、遺伝学など多岐に渡る。

- 寄生虫の感染性の分子機構の解明
- 寄生虫に特異的な代謝、オルガネラの生化学的、生物学的解析
- 寄生虫の小胞輸送、ファゴサイトーシス・トロゴサイトーシスの解析
- 寄生虫株間のゲノムワイド解析およびゲノム比較解析
- マラリアやアメーバ症などの寄生原虫症に対する創薬
- RNA 成熟化・タンパク質合成系の多様性の解析



赤痢アメーバ原虫によるヒト細胞の捕食

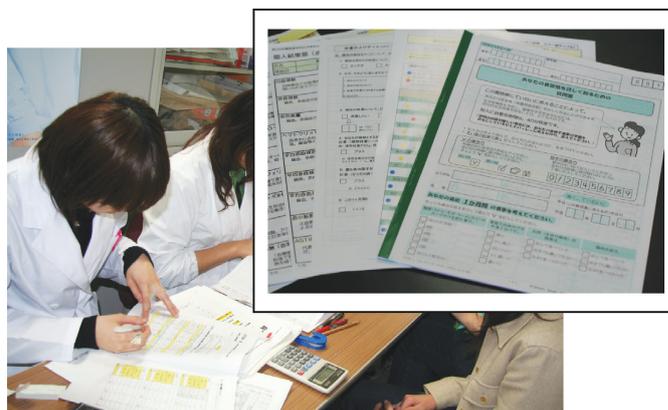


公共健康医学 School of Public Health

社会予防疫学 *Social and Preventive Epidemiology*

生活習慣病の予防に関する疫学研究を行なっています。特に、栄養（食事）が疾病予防や疾病管理に果たす役割を疫学的に検証する学問である『栄養疫学』を研究の軸にしているまれな研究室です。

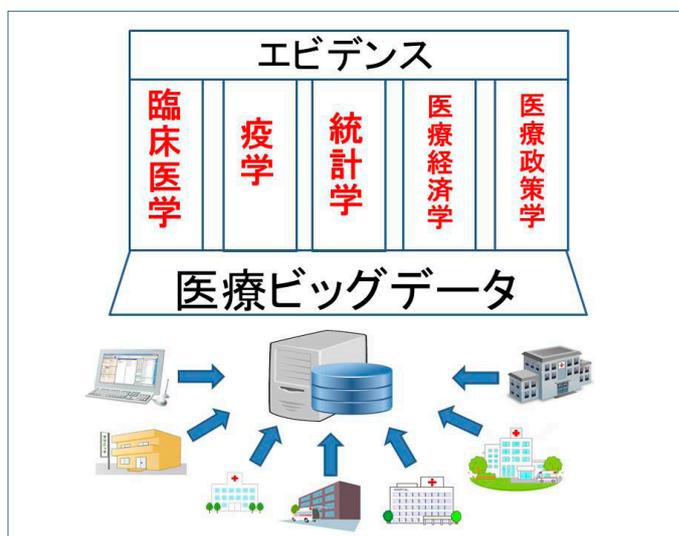
- 食事調査の方法論に関する研究
- 栄養素摂取量・食行動と健康状態との関連に関する疫学研究
- 栄養改善活動手法の開発とその効果検証に関する研究
- 「栄養（食事）と健康の疫学研究」に関する文献データベースの確立
- 栄養が関連する疾患の臨床研究グループとの共同研究



臨床疫学・経済学 *Clinical Epidemiology and Health Economics*

疫学、統計学、臨床医学、経済学など各領域の専門家との共同により、大規模保健医療データベース等を用いた臨床疫学、医療経済学、医療技術評価学、医療政策学などの学際研究を実践する。

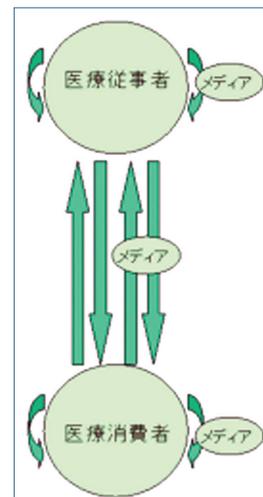
- Diagnosis Procedure Combination (DPC) データを用いた臨床疫学研究
- 政府統計を用いた医療経済・政策研究
- 観察データの統計分析手法の応用
- 複数のデータベースの統合



医療コミュニケーション学 *Health Communication*

医療コミュニケーション学分野では、従来の大学病院医療情報ネットワーク研究センター（UMIN）における情報システムの構築・運用を主体とした研究を継続しつつ、保健医療分野における様々なレベルのコミュニケーションに関する実証研究を展開している。

- 健康医療情報の一般社会へのコミュニケーションに関する研究
- 患者 - 医療者間コミュニケーションに関する研究
- ヘルスリテラシーに関する研究
- UMIN に関する研究
- 臨床・疫学研究のための情報システムの開発・運用の研究
- 情報ネットワークのセキュリティに関する研究



精神保健学 *Mental Health*

<http://plaza.umin.ac.jp/~heart/>

精神保健学分野は、ストレスおよび精神健康の社会的決定要因、精神疾患および自殺の予防など、精神保健の幅広いトピックスについて教育研究を行っている。授業では、精神保健学1（精神保健の疫学と対策）、精神保健学2（職場のメンタルヘルス）を担当する。

- 地域の精神保健疫学
- 職場のメンタルヘルス
- ポジティブメンタルヘルス
- ストレスマネジメント
- 災害と精神保健
- 国際精神保健



教室歓送会

保健社会行動学 *Health and Social Behavior*

保健社会行動学分野では、従来の健康教育・社会学・老年社会科学の流れを汲み、社会構造・関係と個人の健康・行動をつなぐメカニズムの解明、健康の社会的決定要因に対する政策プログラムの評価を目指し、人文科学と健康科学の分野横断的共同研究を国内外において展開している。

- 社会経済的地位が及ぼす世代間の健康影響
- 高齢者における引退・就労・社会参加の健康影響
- 医療・介護システムの健康影響
- 慢性疾患患者における QOL



Source: Othman and Whitehead, 1991

医療倫理学分野では、生命・医療倫理、研究倫理、臨床倫理の領域における理論的研究と実証的研究を行っている。主な研究のトピックには、倫理理論、インフォームド・コンセント、倫理委員会、臓器移植、臨床倫理コンサルテーションなどがある。2009年7月から「生命・医療倫理教育研究センター」(CBEL)を設置し、生命・医療倫理学の社会的・国際的展開を推進している。(http://www.cbhel.jp/)

- 日本における倫理委員会の機能と責任の研究
- 先端医療技術に関する社会的合意の形成方法に関する研究
- アジアにおける臨床倫理の比較研究
- 日本における事前指示の適用可能性の研究
- 生命・医療倫理教育の評価方法の開発
- 生体臓器移植の心理社会的・倫理的側面の研究

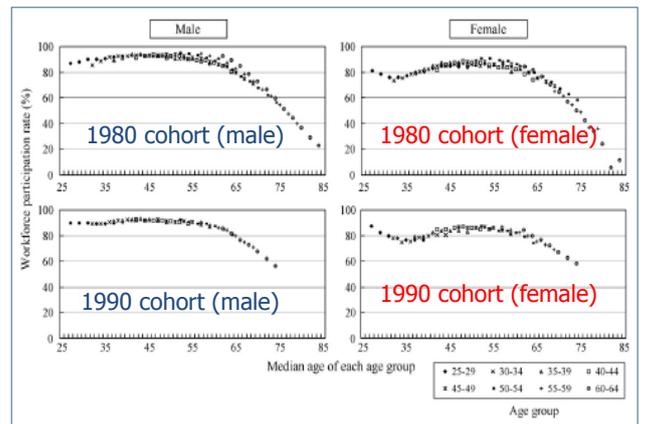


アウトリーチ活動：CBELは倫理委員会のメンバーのための人材養成コースを開講している。主な受講者は、医師、看護師、医業情報担当者(MR)などである。

健康医療政策学 *Health Policy*

健康医療政策学は、健康・医療領域の政策形成の基盤となる科学的エビデンスの収集、形成、発信に係わる調査・研究を行う学問領域です。本分野では、国内外のフィールドでの調査活動と研究室での資料・データ分析作業との有機的関係を重視しつつ教育・研究を進めています。なお、本分野は社会医学専攻の公衆衛生学分野を兼担しています。

- 医療制度の効率性と公平性に関する実証研究
- 医療従事者の需給に関する研究
- 職域・環境における健康問題に関わる疫学研究
- 医療サービスの効果・効率・質に関する研究

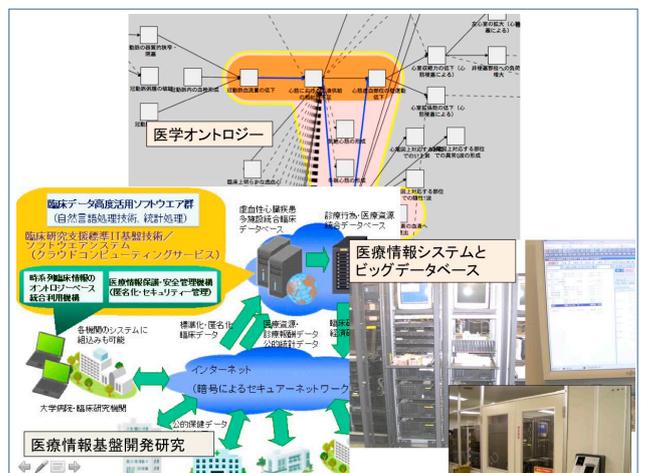


わが国の医師就業率 (年齢・性別)

医療情報システム学 *Healthcare Informatics*

医療における情報システムの基盤技術と役割、組織論、情報管理、情報倫理、標準化など医療におけるICT化全般について、情報システムや電子カルテシステムの設計・開発・導入における諸問題の実践的教育と研究を行っています。またICT化推進に必要な政策・行政面での課題解決方法についても検討します。研究教育部門は社会医学専攻医療情報経済学分野、実務部門は東大病院の企画情報運営部として全体が一体で運営されており、実務フィールドでの教育研究ができることが特徴です。

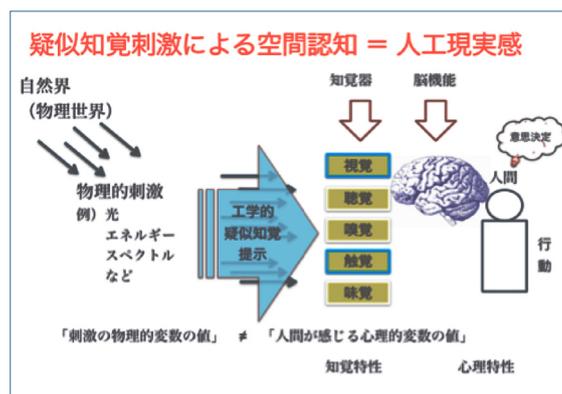
- 医療情報データベース統合化とビッグデータ解析
- 自然言語処理技術による医療データの知識抽出
- 臨床医学オントロジーの構築
- リアルタイム医療安全監視システムの研究開発



医療情報データと医学知識オントロジーの統合化

臨床情報工学とは、医学・医療の臨床現場で行われている情報処理へのコンピュータ科学技術の応用に関する教育・研究を担う医療科学分野である。特に、データマイニング、知識処理、可視化技術の応用や公共保健領域における情報処理技術開発に関する研究・教育を理工学系研究者を含め国内外の多彩な分野の研究者と協力して行い、社会への貢献を目指している。

- 医学における意思決定
- クリニカルバイオインフォマティクス：データマイニング・データベースからの知識発見
- 人工現実感技術の医学応用
- 公共健康医学における情報処理



人工現実感技術の医学応用

異状死の解剖・組織検査・生化学検査・CT検査・中毒検査・DNA検査などを実務として従事するほか、下記の研究を千葉大学大学院医学研究院附属法医学教育研究センターなどと協力して行っている。

- 危険ドラッグを含む違法薬物の検出に関する研究
- 死因究明のために、CT、MRIなどの画像診断機器を応用する研究
- CTを用いた年齢・身長推定及び性別判定の検討
- ヒトの組織の力学的特性に関する研究
- 溺死診断の質の向上に関する研究
- 新しいDNA検査法の、法医学実務への応用に関する研究



法医解剖室



CT室

公共健康医学専攻の下記分野は指定の箇所をご参照ください。

- 生物統計学 生物統計学／疫学・予防保健学 (p42)
 健康教育・社会学 保健社会行動学 (p50)



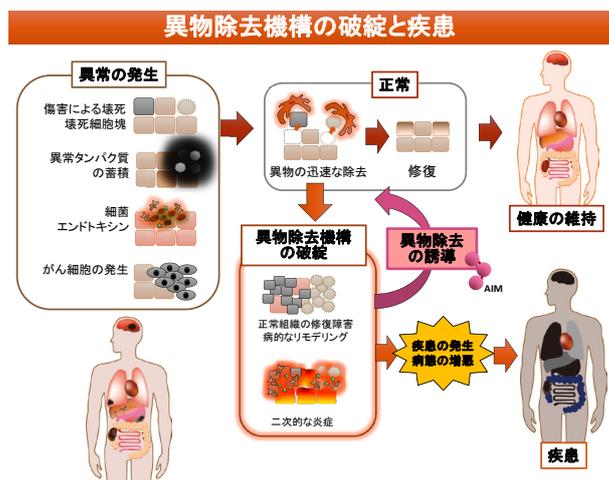
疾患生命工学センター Center for Disease Biology and Integrative Medicine

分子病態医科学部門 *Molecular Biomedicine for Pathogenesis*

<http://tmlab.m.u-tokyo.ac.jp/>

生体内では、細胞の癌化や細胞の死、過剰な脂肪蓄積やタンパク質の変性などにより、生体にとり好ましくない、さまざまな異物・不要物が常に発生している。このような異物は通常マクロファージを始めとした貪食細胞によって速やかに除去され、組織の修復が誘導されることにより、生体の恒常性は維持されている。この異物除去機構に障害があると、異物の蓄積により正常な組織構築が崩れるとともに、二次的な炎症や線維化が惹起され、様々な疾患となる。すなわち、このような異物除去機構は生体の恒常性を維持し、健康状態を保つのに必須なメカニズムであり、私たちはこのシステムを利用した新しい疾患治療法の開発を目指している。

- 私たちが発見した血中タンパク質 AIM (Apoptosis inhibitor of macrophae) による異物除去機構の分子メカニズム解明
- 異物除去機構の破綻により起きる疾患の解明：急性腎障害、慢性腎臓病、がん、肥満、神経変性疾患、自己免疫疾患、老化など
- 異物除去機構を利用した疾患の予防・治療法の開発



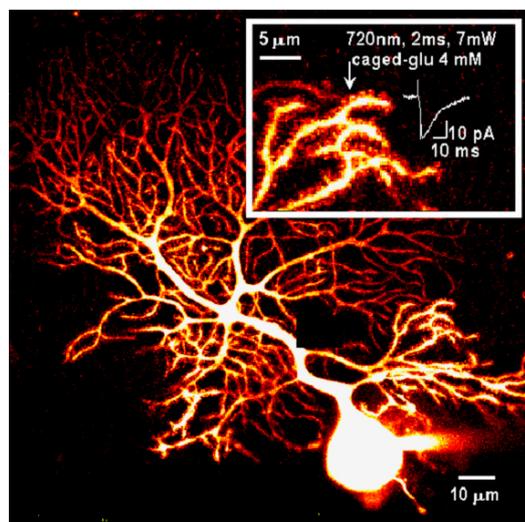
構造生理学部門 *Structural Physiology*

<http://www.bm2.m.u-tokyo.ac.jp/>

新しい光「超短パルスレーザー」を用いた2光子励起顕微鏡を利用して、これまで観察できなかった臓器の深部を分子細胞レベルで可視化し、更に、光の精度で臓器標本を刺激する手法の応用・開発を進めます。この手法を用いて、大脳皮質や分泌臓器の機能をできるだけ個体に近い標本で明らかにし、また、疾患のメカニズムを解明します。

- 大脳皮質のシナプス動態：記憶、認知、精神疾患との関連
- 分泌現象の解明と制御：シナプス、膵臓ランゲルハンス島、糖尿病との関連

2光子励起顕微鏡によって可視化した脳細胞の形態と単一シナプス機能



医療材料・機器工学部門 *Biomedical Equipment and Biomaterial*

<http://www.cdbim.m.u-tokyo.ac.jp/>

本部門は、基礎医学、臨床医学にバイオエンジニアリングの中でも特に機械工学・計測工学・材料工学・化学システム工学などの工学を融合させた観点から、臨床応用を目指した医療機器や医療材料に関する基盤技術の研究開発を進めている。医療機器の研究開発では、生体と相互作用が大きくかつ侵襲性の低い超音波を用いた新規なイメージングシステムや、超音波を用いた低侵襲治療、薬剤とのコンビネーションデバイスの開発を行っている。また医用材料の研究開発では、多糖類・樹状高分子・DNA 誘導体を出発物質に、新規医用ハイドロゲル創製を行っている。これら材料を用いて、人工臍島や人工赤血球の開発、腹腔疾患への薬物送達システムの開発を行っている。

- 超音波 Computed Tomography
- 集束超音波治療
- 超音波薬剤送達システム
- 新規医用ハイドロゲルの創製
- 腹腔癒着防止材料、腹腔疾患への薬剤送達システムの開発
- マイクロカプセル作製技術による人工臍島、膜乳化法による人工赤血球の開発

超音波CT(Computed Tomography)



集束超音波治療



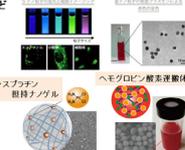
「医用injectableハイドロゲルの開発と疾患治療」

ヒアルロン酸・アルギン酸・ゼラチンなど



「医用微粒子の開発と応用：ナノ粒子からマイクロ粒子まで」

ヘモグロビン懸濁液



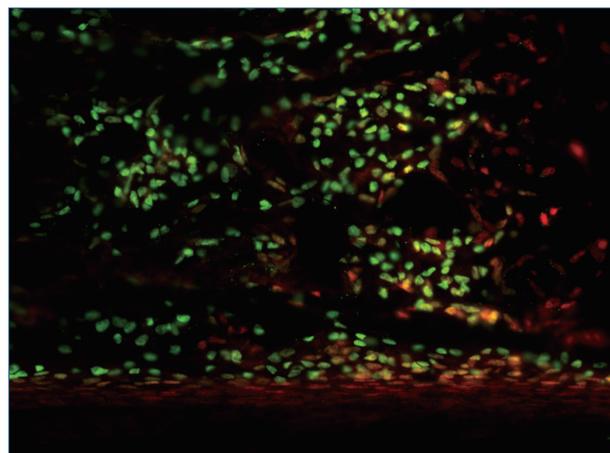
ドラッグデリバリーシステム：胃がん腫瘍種・中皮腫・肝硬変
再生医療：細胞足場材料(骨再生)・細胞封入カプセル(臍島)・
酵素運搬体
非侵襲治療：腹腔癒着防止材・止血材・塞栓ペース

臨床医工学部門 *Clinical Biotechnology*

<http://www.tetrapod.t.u-tokyo.ac.jp/ohba-tei/>

本部門では、「骨軟骨における細胞運命決定機構の理解に基づいた分化・増殖制御方法の開発」と「生体内足場素材として使用するための要求特性を十分に満足する新規バイオマテリアルの開発」を研究基盤としている。これらの知見を組み合わせることで、局所細胞の分化・増殖を直接制御する新たな骨軟骨組織工学・再生医学の実現を目指す。

- ゲノムワイド解析とバイオインフォマティクスの手法を駆使した、細胞運命決定機構におけるエピゲノムダイナミクス、遺伝子制御ネットワークの理解
- 前駆細胞の分化・増殖に関するゲノムワイドなエビデンスに基づいた組織再生用生理活性物質の同定
- 生体材料の設計原理に立ち戻り、基礎科学の視点を十分に取り入れた、高性能・高生体適合性バイオマテリアルの創製
- 組織修復における足場であると同時に生理活性物質のキャリアーとして働き、組織再生を誘導するインプラントデバイスの開発



分化段階特異的な分子 (緑 : Sp7、赤 : Runx2) を発現しながら発生する骨前駆細胞

健康環境医工学部門 *Environmental and Metabolic Health Sciences*

<http://env-health.m.u-tokyo.ac.jp/>

脂質は生体における最大のエネルギー源であり、細胞膜を構成する主要成分であり、シグナル分子としても働く。また脂質は食品から摂取される環境栄養因子であると同時に、適宜代謝を受けて時空間的に生体応答を制御する組織環境調節因子でもある。本部門では、脂質ならびにその代謝産物が関与する脂質ネットワークにフォーカスを当て、脂質代謝に関わる酵素や受容体の遺伝子改変マウスの解析に脂質の網羅的分析(リビドミクス)を展開することで、代謝・免疫疾患等の現代社会で問題となっている疾患の分子病態を解明する。これを基盤に、脂質代謝の変容に関わる疾患の診断・予防・治療に向けた臨床展開を目指す。

- 脂質代謝に関わる酵素や受容体の遺伝子改変マウスを用いた脂質の新しい機能の探索
- 代謝・免疫・皮膚疾患などにおける脂質の量的・質的な変動の意義の解明
- 関連する疾患の診断・予防・治療に向けたバイオマーカー・創薬への展開

脂質代謝酵素(リパーゼ)群とその代謝物の機能解明を通じて脂質から生命を考える

Quality of Life (QOL) のための Quality of Lipids (QOL) の研究



動物資源学部門 / 動物資源研究領域

Animal Resources / Research Resources and Support - Animal Research

動物資源学部門では脳機能、癌発生の分子基盤を個体レベルで明らかにするため、遺伝子操作マウスを作製、解析しています。また、これらの変異動物がヒト疾患モデルとなり得るかどうかの検討も行い、有用な疾患モデル動物の樹立も目指しています。さらに、CRISPR/Cas システムを用いた哺乳動物のジーンターゲットングを行っています。動物資源研究領域では、動物実験施設の管理運営、発生工学サービスの提供、動物実験計画に対する助言、実験動物学の教育等を行っています。

- 遺伝子操作マウスを用いた脳機能・神経発生・悪性腫瘍発生の分子基盤の研究
- 神経精神疾患・悪性腫瘍等の疾患モデル動物の樹立
- CRISPR/Cas システムを用いた哺乳動物の発生工学



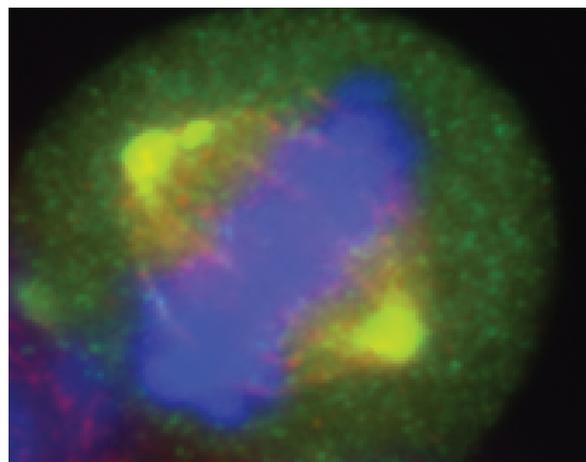
代謝型グルタミン酸受容体 mGluR1 を欠損したマウス

放射線分子医学部門 / 放射線研究領域

Molecular Radiology / Research Resources and Support - Radiation Biology

臨床腫瘍学の中心となる放射線治療および抗癌剤治療の学術的基盤として、DNA 二重鎖切断修復の分子機構を解明するとともに、DNA 複製や細胞周期制御などを含んだ DNA 代謝ネットワークと染色体不安定性の関連性の観点から新たな治療戦略の基盤研究を進めている。

- 相同組換え修復の分子機構
- 相同組換えと非相同的断端結合の選択機構
- DNA 再複製の分子機構
- 染色体数異常の生成機序
- 減数分裂特異的組換え遺伝子の機能解析



異数体の原因となる中心体断片化

<http://www.cdbim.m.u-tokyo.ac.jp/>

医工情報学部門 / 医工情報研究領域

Biomedical Informatics / Research Resources and Support - Biomedical Informatics

本部門では、医用人工知能システムの開発と臨床応用を目指し、医学知識データベースに基づいた知識推論手法と機械学習手法をハイブリッドに組み合わせ、コンピュータを用いた各種診断支援や大規模臨床データベースからの医学知識発見を高精度に行うための手法の開発を行っている。また医学系研究科医療情報学分野・附属病院企画情報運営部と密接に連携し、実臨床データを対象とした解析、成果の臨床現場へのフィードバックを進めると共に、医学部情報化推進室を通じて医学研究支援情報システムの運用管理業務も行っている。

- 臨床医学オントロジーの研究開発と臨床応用
- 知識推論と機械学習を用いた診断支援システムの開発
- 自然言語処理による診療テキスト解析と知識抽出
- 次世代電子カルテシステムの開発



医学研究支援電子計算機システム

<http://www.cdbim.m.u-tokyo.ac.jp/>



医学教育国際研究センター The International Research Center for Medical Education

医学教育学研究部門 *Department of Medical Education Studies*

医学教育・医療者教育のあり方を幅広く研究する部門である。医学・医療者教育における国際的研究のトレンドを把握し、実践的な研究活動の成果や集積した情報を活用してこの領域の発展に寄与することを目指している。国際的なレベルの臨床能力と研究マインドを持つ人材を涵養する卒前・卒後教育カリキュラムの開発などグローバルリーダーたる医療人の育成もこの部門の大切な活動のひとつである。



北村前教授による講義風景

医学教育国際協力学部門 *Department of International Cooperation for Medical Education*

アジアを中心とした国々における医学教育分野の国際協力プロジェクトに参画し、活動を通じた実践的な研究・開発を行うことを主なミッションとする部門である。また、国内外の医学教育分野における国際協力に関する情報収集、人的交流に努め、国内外の各種医学教育関連プロジェクトをサポートする。



アフガニスタンでのPBLの取り組み

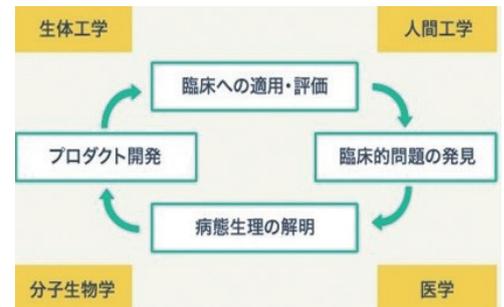


グローバルナーシングリサーチセンター Global Nursing Research Center

ケアイノベーション創生部門 *Division of Care Innovation*

我が国は、少子・超高齢社会をむかえ、「治す医療」から「支える医療」への大転換が求められている。その中で、“ケア”の中核を担う看護学の改革、つまり、ケアイノベーションを先導できる若手看護学研究者育成を目指す異分野融合研究・教育環境の醸成が期待されている。当教室では、理工学者や企業とともに、各個人の健康障害による日常生活不利を緩和するケアプロダクトを開発・普及を行うことを目的とし、異分野融合型イノベティブ看護学研究の推進の一助になることを目指す。

- ロボティクスナーシング
 - ・ コミュニケーションロボットのソフトウェア開発
 - ・ 看護動作の計測
- バイオロジカルナーシング
 - ・ 高齢者のドライスキンの病態・分子メカニズムの解明
 - ・ 皮膚浸軟の病態・分子メカニズムの解明
- イメージナーシング
 - ・ 看護ケアをサポートする超音波技術支援システムの開発
 - ・ 診療補助のためのイメージング技術を用いた遠隔サポートシステムの開発
- トランスレーショナルリサーチ
 - ・ ロボティクスマットレスの臨床評価
 - ・ インドネシアにおける糖尿病足潰瘍評価スケールの臨床評価

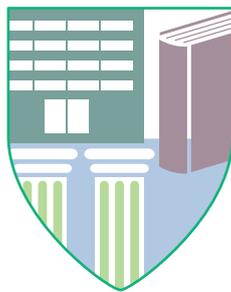


看護システム開発部門 *Division of Nursing System*

本部門は、「文化・社会的存在に対する看護実践の解明と質の高い実践を支える日本発の看護理論の構築並びに政策提言」を行うこと目的に研究活動を強力に推進する。ヘルスクオリティ・アウトカムリサーチ分野では、ヘルスクオリティをよりよく評価できる方法論を開発し、その当事者による評価をアウトカムに据えた研究を展開し、アウトカムベースで効果的かつ至適化された看護システムについての知見を創出する。ケアクオリティ・マネジメント分野では、ケア（看護・介護）の質保証と継続的質向上システムの構築を目的とした、従来の研究方法にとらわれないイノベティブな研究活動に取り組む。

- ヘルスクオリティ・アウトカムリサーチ分野
 - ・ 直接または間接的な看護ケアの実践と評価
 - ・ 当事者による評価をアウトカムに据えた研究の展開
 - ・ 新たなヘルスクオリティ指標の発見
 - ・ ヘルスクオリティをよりよく評価できる方法論の開発
- ケアクオリティ・マネジメント分野
 - ・ ケアの実践知探究
 - ・ ケア従事者への支援
 - ・ 地域包括ケアシステムにおけるケアの質の保証
 - ・ 質指標の開発・ベンチマーキング





教育研究関連施設 Institution

国際交流室 *The Office of International Academic Affairs*

<http://koryu.m.u-tokyo.ac.jp/homepage00.html>

国際交流室は医学系研究科長の直轄組織として、国際交流委員会の決定事項に従って、1) 国際教育交流 (医学系研究科・留学生の教育・研究上の相談・支援)、2) 国際学術・研究交流 (東京大学医学部学生の海外短期実習の相談・支援及び海外の大学医学部学生の受け入れの相談・支援)、3) 医学系研究科・若手研究者の海外留学の相談・支援、4) 医学英語の講義実施及びその教材の開発、を主として機能・活動を果たしている。

MD 研究者育成プログラム室 *Medical Scientist Training Program*

<http://www.ut-mdres.umin.jp/>

MD 研究者育成プログラムは、医学部生が早いうちから最先端の基礎研究に触れて、研究者としての姿勢を体得することを目標として平成20年度から運営されています。各学年15人程度の履修生には、医学科の通常のカリキュラムと並行して、時間外に、基礎医学ゼミ、英語ゼミ、研究室配属、フリークオーターなどで基礎研究に触れてもらいます。また、短期海外留学、学会派遣、他大学との交流を通じて、基礎研究を志す医学生ネットワークの形成を目指します。



研究倫理支援室 *Office for Research Ethics Support*

研究倫理支援室は、医学系研究科・医学部・附属病院において行われる研究における被験者の健康、権利、尊厳を守ることを第一義的な目的としており、その上で、研究者が倫理的に適切な研究を円滑に実施できるよう支援している。倫理委員会事務局の運営を主業務とし、研究倫理セミナーの企画・運営、支援業務を通じた研究者への倫理教育、研究倫理支援職を志す人材の育成、また、関連する研究を行っている。

ライフサイエンス研究機器支援室 *Life Sciences Core Facility*

ライフサイエンス研究機器支援室では、医学系研究科・医学部の研究者に対し、質量分析計やセルソーター、フローサイトメーター、高性能蛍光顕微鏡をはじめとする、共通性の高い研究用機器の管理運用および技術支援を行っています。

臨床実習・教育支援室 *The Office for Clinical Practice and Medical Education*

臨床実習・教育支援室は、クリニカルクラークシップサポートセンターを前身として、医学生の教育、特に5・6年次の臨床実習を支援・推進するために、平成27年4月に設置されました。参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）の円滑な運営に加え、診療科の教員や学生から適宜意見を聴取することにより、実習カリキュラムや評価法の改良にも努めています。また、医学部教務係や学生支援室などと連携を取り、個々の学生へのサポートも心がけています。

医学図書館 *Medical Library*

<http://www.lib.m.u-tokyo.ac.jp>

東京大学医学系研究科・医学部医学図書館は、本学部における教育、研究のための総合的施設として、1961年11月に開館しました。以来、今日に至るまで、質量共に充実した図書館活動を目標として努力しています。当館は、全面開架方式を採用しており、館内の資料は、自由に閲覧することができます。

- 所蔵資料
蔵書冊数 和文 106,037 欧文 165,875 合計 271,912
雑誌タイトル数 和文 1,979 欧文 1,992 合計 3,971
- 来館者数 79,109 人
- 貸出総冊数 17,784 冊

(H28年3月31日現在)



健康と医学の博物館 *Museum of Health and Medicine*

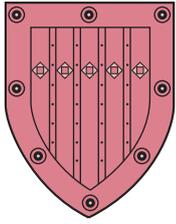
<http://mhm.m.u-tokyo.ac.jp/>

「健康と医学の博物館」は、東京大学医学部・医学部附属病院の創立150周年記念事業の一環で計画されたもので、平成23年1月20日に開館した。展示室は二つに分かれており、明治初期の医学書や医療器具、石原式色盲検査表、本学で開発された胃カメラなどを展示した。企画展では、医学・医療の進歩への理解を促すための展示を展開している。

企画展は、第1回「感染症への挑戦」に続き、毎年2回開催している。最近の企画展では、「ウイルス」「腎臓」について取り上げている。

今後も、引き続き年2回の企画展と一般向けのイベントを開催する。





東京大学 大学院医学系研究科 医学部



地下鉄 本郷三丁目駅
 ●：地下鉄丸ノ内線
 ●：大江戸線



東京大学大学院医学系研究科・医学部

医学系研究科長・医学部長 宮園浩平

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

電話 03-5841-3303 (医学部・医学系研究科 事務部 総務係)

<http://www.m.u-tokyo.ac.jp>



The University of Tokyo

